

自然科学紀行古水史跡編(13)

誌名	水利科学
ISSN	00394858
著者名	山口,晴幸
発行元	水利科学研究所
巻/号	52巻6号
掲載ページ	p. 24-73
発行年月	2009年2月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



自然科学紀行古水史跡編～
沖縄水史観（XIII）

山 口 晴 幸

目 次

- 1章 古水を訪ねて南島へ
(以上293号掲載)
- 2章 古琉球の神々が映える東御廻いの霊泉・命泉巡拝
(以上294号掲載)
- 3章 琉球神の住む聖なる島「久高島」と霊泉
(以上295号掲載)
- 4章 雅の世界を彷彿させる琉球王朝世界文化遺産と水利施設
(～17. 296号掲載)
(18～. 以上297号掲載)
- 5章 琉球王朝繁栄の礎を築いた首里城跡下に湧く「樋川」と「川」
(以上298号掲載)
- 6章 普天間飛行場を取り囲む古泉の叫び
(以上299号掲載)
- 7章 古琉球の水を診る
(以上300号掲載)
- 8章 伊江島の断崖絶壁に湧く命泉「湧出」と「ミンカザントゥ」
- 9章 粟国島の大水瓶「トージ」に偲ぶ水確保の知恵と苦勞
- 10章 久米島の海浜景観に映える阿嘉のひげ水と古井戸
(以上301号掲載)
- 11章 隆起環礁の島「南大東島」の誕生と日本最大規

模を誇るカルスト湖沼群

（以上302号掲載）

12章 宮古島の無尽蔵に地下水を秘めた洞井と水事情

（以上303号掲載）

13章 伊良部島の迫立つ海蝕崖縁に湧く命井「サバ沖井戸」

14章 下地島の巨大連通器を連想させる神秘的な池「通り池」

15章 石垣島の大洋波から復活した真謝井戸と不思議な古井戸

16章 竹富島の星砂が煌く古琉球赤瓦屋根の家並風景と命井

17章 最南端の島「波照間島」に湧く霊泉「シムスケー」と水事情

（以上304号掲載）

18章 最西端の島「与那国島」に湧くティンダハナタの断崖霊泉と水事情

19章 与那国島の巨大な石鹽と不思議な奇岩

20章 与那国島の人減らし断層「久部良割」の戦慄と人頭税

21章 宮古・八重山諸島の不思議な大岩「津波石」

おわりに

参考文献

18章 最西端の島「与那国島」に湧くティンダハナタの断崖霊泉と水事情

1. 断崖絶壁に囲まれた日本最西端の島

九州南端から台湾にかけて約1,200 km にわたって南西諸島が弧状に連なっている。その最南西端に形成する諸島が八重山諸島である。与那国島は、その八重山諸島の最西端、即ち日本の最西端に位置する島で、日本最後の夕日が見える西崎には、ここが日本最西端の地（東経122度56分9.33秒、北緯24度26分44.99秒）であることを記念した高さ2.5 m 程の2段重ねの大きな石碑が建立されている（写真18-1）。沖縄本島まで509 km、東京まで2,030 km 離れ、八重山諸島の主島である石垣島と117 km に位置し、稀に西方の海上に山並みを映し出す台湾と111 km の領海を隔てて対峙する、まさしく国境の島である。



写真18-1 与那国島の西崎に建つ「日本最西端之地」を示す石碑（2004.8.9撮影）

与那国島は人口約1,800人で、周囲約27.5 km、面積28.9 km²の小島ではあるが、無人島を含めて31島から構成される八重山諸島の中では西表島^{いりおもて}、石垣島に次いで三番目に大きな島である。東西約12 km、南北約4 kmと東西方向に長く菱形の島影をしている。島東部には宇良部岳^{うらべ}（231 m）とインビ岳（164 m）を主峰とする宇良部山地が東北東から西南西にかけて広がり、また西部では久部良岳^{くぶら}（195 m）と与那国岳^{よなぐに}（167 m）を主峰とする満田原山地^{みつたばら}が東西に走り、地形は山地と断崖などが交差して起伏に富み、多様な自然環境が形成されている。所々に細砂の白浜を挟在する海岸線は、切り立った断崖絶壁と峻険な岩礁域が連続する男性的地形である。殊に東端^{あがりざき}の東崎から東南岸部のサンニヌダイ海岸域にかけては、節理構造の発達した新第三紀中新世八重山層群の砂岩層が高さ70~100 m近く垂直に海底に没する断崖絶壁が形成されており、白波を浴び紺碧の海を貫く軍艦岩や立神岩などの巨大な奇岩が林立し絶景である（写真18-2）。山岳域には亜熱帯ジャングルが広がり、国の天然記念物に指定されている世界最大の蛾「ヨナグニサン」（羽を広げた時の横幅約18~27 cm）や最近発見された世界最小の蝶「タイワンヒメシジミ」（横幅約2 cm）などの珍蝶蛾、大陸を往来する渡り鳥などの野鳥の宝庫でもある。島のあちこちで見かける農耕馬として活躍した独特の与那国馬は、外国馬の血統が混じっていない純和種の希少な小型馬である。

亜熱帯海洋性気候に属し、島の周りを流れる黒潮海流によって年間の気温差

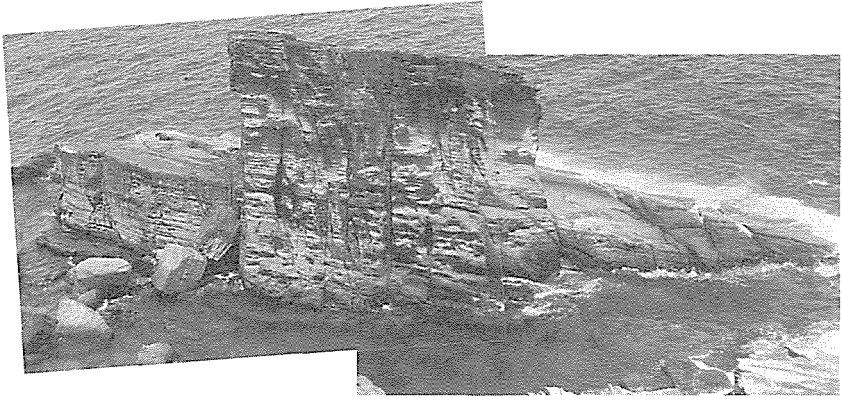


写真18-2 断崖絶壁に囲まれた与那国島の代表的な奇岩「軍艦岩」（1995.8.6撮影）

が小さく、最高平均気温25.8℃、最低平均気温21.4℃で、年平均気温は23.5℃である。年間降水量は約2,300 mmと多雨で、特に5月の梅雨季と台風シーズンの9～11月に降水量が多い。島東部^{そない}祖納地区には^{たばる}田原川が、西部^{くぶら}久部良地区には天然池の久部良ミトがあり、崖湧水や洞穴地下水も多く見られ、水資源には比較的恵まれている島である。

2. 女酋伝説を秘めたティンダハナタと断崖霊泉

与那国島の北岸中央部付近には祖納地区^{そない}の集落が広がっており、^{なんたはま}波多浜に流れる^{たばる}田原川を挟んで、その背後には高さ百数十 m に及ぶ垂直な断崖絶壁が迫り上がっている（写真18-3）。車道脇から断崖上へ向かう坂道を900 m 程登ると、海拔100 m 付近で断崖の岩壁が浸食されてできた自然の展望台に辿り着く。

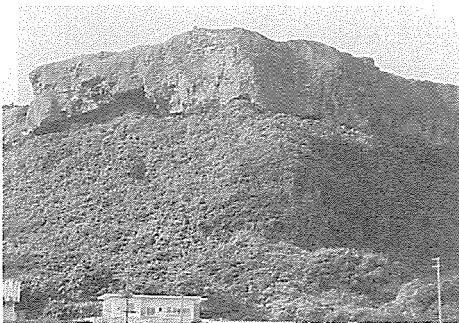


写真18-3 ティンダハナタの断崖絶壁（2004.3.23撮影）



写真18-4 オーバーハングの岩壁
が続くティンダハナタの
展望台への小路 (1995.8.6
撮影)

ここは、ティンダハナタと呼ばれている景勝地で、「ティンダバナ」ともいわれ、漢字では「天蛇鼻」と書く。1974年5月13日、沖縄県の名勝に指定された地で、眼下には琉球古来の赤瓦の家並、白砂の波多浜、紺碧の波多港などが広がり、遠くには東端の東^{あがりざき}崎灯台や太平洋・東シナ海が一望できる島民の憩いの場所となっている。

岩壁がひさしを張り出すようにえぐられた展望台には、幅2m程度の遊歩道が敷設されている(写真18-4)。周辺の地層をよく観察すると、遊歩道付近の地層に不整合が見られる。崖の上層には隆起珊瑚の琉球石灰岩層が、遊歩道より下層には八重山層群の砂岩層が堆積している。両地層での固結力の違いから浸食性に差異が生じ、地層境界付近が自然に洗掘され抉り取られたような地形が形成されたと推察される。展望台の遊歩道は長さ100m程であるが、断層運動を伴った激しい地殻変動で形成されたティンダハナタの高い断崖は、西方に4kmほど続いている。

県と与那国町教育委員会による遊歩道入口に設置されている説明板には、ティンダハナタについて次のような紹介がされている。

『 県指定名勝 ティンダバナ 昭和49年5月13日指定

字祖納の南西に屏風のようにそそり立つ標高100mのティンダバナは、台形状の地形をなしている。眼下には祖納集落の家並が展開し、東にウラブ岳、西に雄大な東支那海が一望され、天然の展望台となっている。展望台近くの岩陰には、豊富な湧水があり、岩壁には八重山の生んだ詩人伊波南哲の詩も刻まれていて、「歴史の丘」として島人たちのいこいの場所に

もなっている。

ティンダバナに続く南の斜面には、与那国島の英雄の一人サンアイ・イソバが出生した古邑サンアイ村が立地し、彼女にまつわる旧跡も多く残されている。彼女は16世紀の末頃に与那国島に君臨した女酋とされる人物であるが、巨体で剛力の持主であったといわれ、政治をよくし島人から尊崇を集めたと語り伝えられている。

沖縄県教育委員会 与那国島教育委員会 』

遊歩道沿いの断崖の岩陰からは澄んだ清水が湧き出しており、手前と奥の2箇所に設けられた水場には湧き出した水を溜めるためのコンクリート製貯留水槽が設置されている（写真18-5）。流量は少ないが、かなり大きな水槽を満たして溢れ出ており、未だかつて涸れたこともなく、訪れる人々の飲料水として愛飲されている。これらの水脈はティンダハナター帯の断崖上に形成されている鍾乳洞窟から浸出する地下水とされている。遊歩道入口から60 m程入った所にある手前東側の水場は「水の霊所（泉）」となっている。水場脇には祈願のための白壁の祠が祀られており、その中には香炉が安置されている。薄暗い岩間奥に水平に差し込まれた細長い塩ビパイプ（長さ約10 m、直径約



写真18-5 ティンダハナタの断崖から湧き出す2箇所の古泉
左：手前の「ヌクの水」といわれる霊泉（2006.3.28撮影）
右：奥の2段式貯水槽から流れ出す湧水（2004.3.23撮影）

5 cm) からは、チ ョロチ ョロと水が流れ水槽を満たしている。この断崖霊泉の水は「ヌクの水」と呼ばれる神聖な霊水で、島の祭事で1番目に行われるアラミディ（新水）の際に供えられる。「アラミディ」と称される祭事は、主婦達が「水の霊所（泉）」に詣でて礼拝し、新しい水を汲んできて自分のカンディン（守り神）に祀って、家内安泰と健康を祈願する祭事とされ、毎年旧暦8月に行われている。

海拔100 mの断崖の岩間奥から湧き出す冷たい清水で喉を潤すことができ、格別の心地よさを味わうことを知り、ティンダハナタの崖霊泉には訪島するたびに必ず足を運んでいる。まさに我国の最西の端から湧き出す聖なる名水である。

3. 島に散在する「水の霊所」

往時より「水の霊所」といわれるところは、ティンダハナタのヌクの他に、タバルカン（田原川上流の水源）、ウバガティ（田原平野北東カマヌ田）、アリシ（東崎西海岸の断崖）、ミディントウ（三根の台の北側）、アンガイミドッチ（新川上流）、アンダの泉（比川浜東端部山側）、アライシ（屋久手と東崎の間）などである。この中でタバルカン、アリシ、アンダの泉、アンガイミドッチの4箇所を散策してみた。

タバルカン（田原上）の水は、田原川上流の水のことである。祖納地区は、ティンダハナタの断崖下を流れ波多浜西端部から海へ注ぐ田原川の流域に発達した集落で、集落発祥の大昔から田原川の水は生活用水や農業用水などに利水され、集落の生活史を支えてきた「生命の水」である。上流域には田原水公園が整備され、奥の樹木に覆われた山麓には山腹から流れ出してきた豊富な水を貯留するコンクリート堰堤が築造されており、今も簡易水道や農業用水としての大切な水源となっている。周辺の水辺には、フクノキ、モクダチバナ、ヤブニッケイ等の亜熱帯植物が群生する自然環境が保全され、ヨナグニサン、トンボ、チ ョウなどの多様な生物の繁殖地となっている。特に、シロミスジをはじめ10種類ほどの台湾産チ ョウ類の棲息水域となっている。公園入口脇の琉球石灰岩の崖からは豊富に地下水が湧き出している大きな洞穴が開いている（写真18-6）。その水辺沿いには、与那国町婦人連会から要望があって、集落共同のコンクリート製洗濯場が1952年7月に設置されたことを記念した石碑が建立されている。当時、洗濯場一帯の水辺には毎日多くの婦女子達が集い、日常談義



写真18-6 かつて祖納集落の共同水汲み場であった「タバルカン」の洞穴霊泉（2003.4.8撮影）

や情報交換で賑わう村人交流の水場になっていたと思う。石碑脇には「水の霊所」でもあることを示す香炉が安置されており、その上（カン）の水流からタバルカンの水を汲んで祈願していた。タバルカンの水は甘い水（塩分の混じっていない水）であったことから集落の飲料水源としても利用されてきた。当時の小学校では、生徒の飲料水のために、夏期になると用務員がタバルカンの水を容器に汲んで天秤棒で担いで運ぶのが日課とされていた。集落の子供達が水浴に興じ魚介類の宝庫であった田原川中流域やその湿原は、今もマングローブが群生し多種多様な水生動植物や水鳥などの貴重な棲息・飛来地となっている。

アリの水は、東崎の断崖絶壁の琉球石灰岩層から湧き出した地下水をせき止めて造った溜池のような泉といわれている。一帯には牧場が広がり、放牧された与那国馬や黒毛和牛の家畜用水として利用されている溜池が散見され、かつてのアリの水と称された溜池は特定できなかったが、この中に「水の霊所」であった溜池があるものと思われる。断崖下の海辺はアリの浜と呼ばれ、砂浜や岩礁域が広がり、打ち寄せる大波の碎ける豪快な海岸線が続いている。多孔質な琉球石灰岩の地層を浸透した地下水が、今でも何箇所かで、浜背後の高さ50 mを超える断崖根元部分から湧き出しているのが容易に確認できる。

アンの水は、島の南岸中央部に位置する比川集落にある^{ひがわ}比川集落にある。高い巨岩積み護岸に囲まれた比川浜東端部の砂浜に面する「水の霊所」で、その背後は南国植物が鬱蒼と繁茂する急峻な山腹が迫り上がる地形となっている。護岸上の山側にはコンクリート床を敷いた狭い平地が造られており、「アンの玉水御川神」と「秘宝秘蔵 宇天龍十一面観音菩薩」と刻んだ2つの石碑と香炉が安置されている。石碑奥の山腹方向には急峻な沢が延びていて、アンの泉はこの沢に



写真18-7 比川集落の海岸脇に流れ出す「アングアの霊泉」
(2004.3.24撮影)

湧き出す水と思われる。1999年8月以来、すでに10度近く訪ねているが、何れの時も涸れ沢となっていることが多く、2005年3月下旬に初めて、南国樹木に覆われた沢奥から流下するアングアの泉の情景に遭遇する機会に恵まれた（写真18-7）。アングアの泉はアラミディの霊所であるが、比川集落に近接していることもあり、タバルカンと同様に、比川の婦女子達の洗濯場としても利用されていたようだ。その手前の護岸の上には、最近、Dr.コトーのテレビ撮影場所となった診療所が建ち、与那国島の新しい人気の観光スポットとなっている。

アングアイミドッチの水は島南東岸部の新川上流の谷間に湧き出す水で、その南方一帯の海岸線はアラガバナと呼ばれ、海拔約80mの断崖が海に突き出すように連続し、島では最も切り立った地形となっている。島を周回する道路脇からアングアイミドッチの谷間に落ちる入口があるが、谷間に降りる道はなく、亜熱帯樹木に覆われた険しい沢が続いているようだ（写真18-8）。50mほど沢奥に進んでみたが、踏査には危険すぎて断念せざるを得なかった。入口道路脇の説明板には次のような紹介がなされている。

『 アングアイミドッチ一帯（町天然記念物）昭和四四年三月二五日指定
アングアイミドッチは、宇良部岳の南側の谷間。長さ1キロメートル、幅四メートルの谷川が流れ、周辺は亜熱帯植物が繁茂している。

川に沿って、約五〇メートルにわたって鐘乳石が地表に連なり、あたりに青緑色の光沢を放っている。川の水は鐘乳石一帯を伏流し、再び豊かな流れをなしている。

また、ここは野鳥の楽園で、シロガシラ、メジロ、ヨナグニカラスバト、



写真18-8 「アンガイミドッチの霊水」の谷間に降りる入口（2004.3.24撮影）

キンバト等が生息している。

与那国町教育委員会 』

4. 「水の霊所」にまつわるイヌガン伝説

水の霊所には、歴史や浪漫伝説を秘めたところが多い。スクの水が湧き出すティンダハナタにはサンアイイソバやイヌガン（犬岩）伝説などがある。サンアイイソバは伝説上の人物といわれているが、明歴弘治十三年（1500年代）与那国島を支配していた女傑であったと伝えられている。4人の兄弟をドナンバラ村、ダテグ村、ダンス村、テバル村の接司（村の支配者）に配置し、各部落を治めさせながら自分は島の中央に位置するサンアイ村に構えて、そこから各部落に采配を振って統治し、内治を善くし外患を防いでいたとされている。サンアイイソバのサンアイは村の名、イソバは女の名で、サンアイ村に住んでいたイソバという女性を意味するとされている。サンアイイソバは、ティンダハナタの断崖の狭い割れ目パサグ（イソバの碑の背後にあるという）を、巨体を屈めながら通り抜け、サンアイ村から祖納村へ抜けるため行き来していたといわれている（サンアイイソバの略歴碑等より）。

ガジュマルやシダ植物などの亜熱帯樹木が鬱蒼と繁茂するティンダハナタの薄暗い崖斜面の奥を覗くと、『女傑サンアイイソバ之碑』と刻字した高さ1.5m程の石柱が樹木の枝葉に隠れるように見える。石碑の前には酒と塩が供えられ

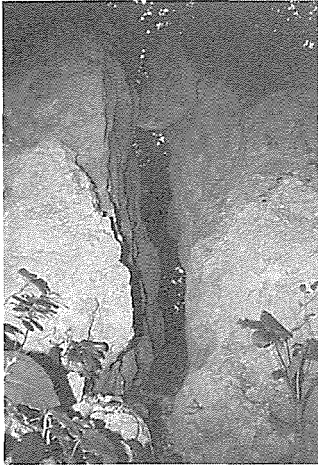


写真18-9 女酋長「サンアイソバ」がカニ歩きで往来したとされる岩の割れ目（2006. 3.28撮影）

ていて、香炉には線香の燃えかすが残っていた。石碑の背後は琉球石灰岩の崖となっているが、その崖には確かに巨体のサンアイソバがカニ歩きで往来していたとされる「パスグ」と呼ばれていた狭い割れ目がある（写真18-9）。割れ目の幅はせいぜい50 cm程度の狭さで、高さは高い所で7 m程、低い所で4 m程ある。入口の天頂部には今にも落下しそうな大岩が、割れ目に挟まるように載っていて怖い。割れ目は奥に7~8 m続いているが、通り抜けても今は道はなく、先は樹木の生茂る藪で行き止まりとなっている。

またティンダハナタの展望台には、サンアイソバの碑と並んで、1979年3月24日町民俗文化財に指定されているイヌガンの碑が建立されている。

『 イヌガン（町民俗文化財） 昭和五四年三月二四日指定

大昔に久米島から中山王府への貢納船が出帆した。しかし、船は荒天に遭い、与那国島に漂着した。一行の中に女一人と雄犬一匹が加わっていた。ある夜から男が一人ひとり犬にかみ殺され、犬と女だけが岩屋で同棲するようになった。

一方、小浜島の漁夫が荒天に遭い与那国島に漂着した。女はこの島に猛犬がいることを知らせ、すぐ島を離れるよう忠告するが、男は女の美貌にひかれ、逆に犬を退治した。

二人は夫婦になり、七人の子宝に恵まれるが、ふとしたことから犬の殺



写真18-10 イヌガン伝説を秘めた
洞穴（2006.3.28撮影）

害を知った女はついに犬の死骸を抱いて命を断った。犬と女が住んでいたところがイヌガンと言われている。

与那国島教育委員会 』

この碑が建つ背後の崖には樹木に覆われた薄暗い小規模な洞穴(写真18-10)があり、それがイヌガン伝説の岩屋のようにも思われる。池間栄三氏による与那国島の地誌、伝説と記録、祭事、民謡を纏め上げた「与那国の歴史」によると、「イヌガン」は漢字で「犬神」と書かれている。そして、この地はティンダハナタ南方の島中央部に位置する野底原に所在するとされ、大正時代までは亜熱帯ジャングルであったが、今は開墾され畑地となっているという。そこには大きな洞窟があって地下水が流れ、その流れは「イヌガン・カラ」と称されていたという。男が犬を殺して死骸を埋めた場所（女が死骸を抱いて自決した場所）は「イタ」と称されている。「イヌガン」の東南方に大きな扁平の黒石があり、その石が「イタ」とされ、その下に犬の死骸が埋められてあると伝えられている。「与那国の歴史」にはそのように記されているが、何度か探索を試みたが、それを確認するすべはなく、確かめるまでにはいたらなかった。このイヌガン伝説の逸話から、与那国島の俚言に、“子供七人生んでも、まだまだ妻に気を許してはいけない”という言葉があるようだ。

ところでその後、宮古軍の侵攻で按司あじに配置した4人の兄弟は殺害されたことから、イソバの晩年は、彼らの安らかな旅立ちを祈念し、「イヌガン」に願所を設けて祈願したと伝えられている。このようなことから、ティンダハナタの断崖霊泉の地に、サイアンイソバと並んでイヌガンの碑が建立されているの

ではないかと思われた。

5. 先人達の水確保の足跡

与那国島は、宇良部岳、与那国岳、久部良岳などの山系が連なり、年間2,000 mmを超えるほどの降水量に恵まれ、島の四方には水脈が走っている。川、池、湿地などの地表水を潤し、また地下水が豊富に流れ出る湧水地や大量の地下水が帯水する洞穴などが一円に散在し、八重山諸島の中でも水資源に恵まれた島である。与那国島の先人達も、他の八重山や宮古に定住した先人達と同様に、塩辛くない飲料に適した水（甘い水）が取水できる川、池、湧水、洞穴などの水源を求めて居住・移住を繰り返し、集落を形成していたと思われる。人口の増加・集落の発展と共に水需要も増し、洞穴や湧水地などの共同水汲み場から、各人家では屋敷に掘り抜き井戸を保有し良質な水の確保を図るようになった。近年では、簡易水道敷設を完備することで、清浄水の安定的な供給配水が実施されるに至っている。

先人達が生活用水などの水を確保するために工夫した主な取水方法としては、下記のような方法がある。

- ①川や雨水の流れを直接せき止めて取水する方法。
- ②地面に穴を掘り、漏れないように周壁を粘土などで固めて水を溜めて取水する方法。これはカブサ（溜池）と呼ばれる方法で、多様な大きさや形状で造られ、家畜の飲用水などに利用されていた。井戸の掘れない家では屋敷内にカブサを掘り、縁を積み石で囲い竹柵で日覆いして飲料水や洗い水などに利用した。最近では、牧場などで赤土を固めた溜池を造り、雨水を貯留して牛馬の用水に利用しているのをみかける。
- ③洞穴や崖などの地層・地形から湧き出す地下水や水流をせき止めて取水する方法。これはカラティと呼ばれる方法で、良質の水を大量に確保できることから、当時、立地に適した山地や崖などには、キダングカラティ、カマチカラティ、アヤガンカラティ、スバルカラティなどの多くのカラティが築造された。ティンダハナタから西方約300 mの断崖下の急峻な沢に築造されたスバルカラティは、大正末頃操業していたハッカ製造工場の産業用水として大量に引水されていたという。しかしその水量もかなり減り、その後廃止されたようだ。かつての面影を残す敷設されたパイプやコンクリート堰堤などの施設が樹木に埋れるように残っていた。

- ④地下水が地表に湧き出ている鐘乳洞窟などの地下水脈が浅い箇所では、自然の洞穴や地層を深く掘り下げ、湧水口のある地底まで石段や石畳を設置して取水する方法。これはウリカー（下井戸）と呼ばれる方法で、大量に良質な水を取水するのに適しているが、汲んだ水は桶や瓶に入れて運ぶため、急で長い石段を何度も上り下りする婦女子の仕事であった水汲みは、大変辛い仕事とされていた。今も畑地などに残っており、農業用水などに活用されている。
- ⑤イキ（池）といわれる特殊な信仰のための水利施設が飲料水や防火用水の備えになっていた。また屋敷のニバイ（花壇）としての大切な役割を果たしていた。母屋上手（カンダ）の敷地に深さ2m程の方形（長さ2m、幅1m）に掘った浅い穴で、水が溜まっているものや濁れているものがある。イキは祖先伝来の由来を秘めた施設とされ、旧暦10月23日にはイキのダイ（祝）という祭祀が行われている。イキを備えていた人家は祖納と比川に数軒程度とされている。

このように当初は、鍾乳洞窟、湧水地、山地の谷間・沢、川、池などの自然の地理・地形を利用して水脈を開発し、その水脈に適した水利施設を構築して水の確保を図ってきた。明治以降から1959年久部良地区に初めて簡易水道施設が整備される近年まで、ほとんどの人家では屋敷内や畑地などに独自の掘り抜き井戸を構築して、恒常的に生活用水や農業家畜用水を確保していた。しかし与那国島の地表部はほとんどが隆起珊瑚礁の琉球石灰岩で覆われているため、地層は硬く井戸掘りにはかなりの難儀をしいられていた。海岸沿いなど、地域によっては、海水が混入して塩辛い水の井戸（塩水井戸）もあった。また地下水脈が深く個人的に井戸を掘れない地域や経済的に掘り井戸を所有する余裕のない家などでは、集落共同で構築した大型の甘水井戸を使用していた。背後を山地に囲まれ砂層が堆積している比川集落や田原川下流域の低地帯に発達した祖納集落には、往時の掘り抜き井戸が数多く残っており、浅井戸を掘ることで比較的容易に甘い地下水を取水できた地域である。祖納地区の人家や空地などを回り井戸を探索すると、ほとんどの人家には今も掘り抜き井戸が残っている（写真18-11）。地下水は十分に溜まっているが、使用されている形跡の井戸はほとんどなく、重い蓋やブロックなどを載せていて、無用の長物的存在となっている。しかしこれらの井戸の中には逆L字型の支柱や鳥居型の支柱を設置した立派な掘り抜き井戸も残っており、集落共同の村井戸として活躍していた、

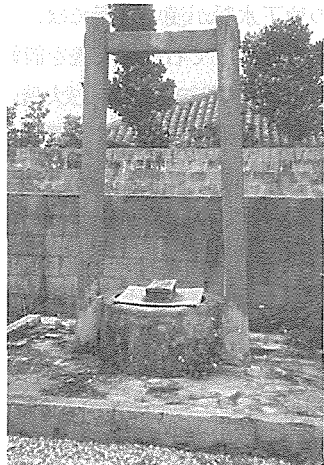


写真18-11 祖納集落などに点在するほとんど利用されなくなった掘り抜き井戸
(2004.3.25撮影)

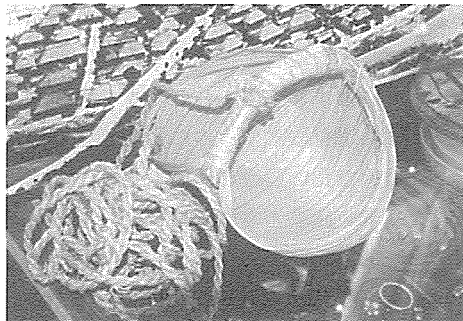


写真18-12 クバの葉で作られた水汲み用の
柄杓「ウブル」(与那国島民俗資
料館展示引用, 2001.8.8撮影)

当時の情景が偲ばれる井戸もみかける。

与那国島では「井戸」のことを「カー」と称し、「甘水井戸」は「アマミンカー」と呼んでいた。古い井戸には直径1mを超える大きな井戸も残っている。井戸の周壁には砂岩や琉球石灰岩の切石を積んだ井筒が構築されている。当初、水汲み用に釣瓶にはクバ（ピロウの方言）の葉を編んで作ったウブル（写真18-12）を用いていたが、後に木製の手桶や金属製のブリキ容器が使用された。水汲みは、クバの釣瓶やロープを結んだ桶や容器を井戸の脇から直接投下して、引き上げる方式によっていたが、切石でできた井筒の縁と釣瓶やロープが擦れて磨耗するので、支柱を立てて滑車を取り付けて汲み上げる井戸も構築されている。

与那国歴史年表（与那国町ホームページより）によると、与那国島全域で簡易水道浄水施設が完成したのは1980年とされている。1959年初めて久部良地区で簡易水道が敷設され、1960年には祖納地区に普及している。1963年からは、本格的に水道施設の整備が開始され、1977年には宇良部浄水場が建設されてきた経緯がある。浄水源となっている田原水源、満田原水源、久部良水源などの各地区の水源は、河川水、湧き水、地下水（ポンプ式揚水井戸）によっている。最近では、多孔質な琉球石灰岩層を巨大な貯留水槽に構築して、水資源の確保

を図る地下ダム構想の計画が進行しつつある。

<フィールドガイド>

・ティンダハナタの断崖霊泉までは、石垣島の石垣港（水・土曜日運行）からフェリー
与那国で久部良港まで約4時間、久部良から定期バスで祖納まで約15分、祖納から徒歩
で約10分。あるいは石垣空港から航路で与那国空港へ約30分、与那国空港から定期バス
で祖納まで約5分、祖納から徒歩で約10分。

<訪調年月日>

①1995.8.6 ②1998.8.16 ③1999.4.3 ④2001.8.8 ⑤2002.4.3～5 ⑥2003.4.5
～8 ⑦2003.8.5と6 ⑧2004.3.22～24 ⑨2004.8.7～9 ⑩2005.3.25～28 ⑪
2006.3.28

(2003.10.21草稿・2004.10.21推敲・2006.5.5了)

19章 与那国島の巨大な石壘と不思議な奇岩

1. 東西南北最端島では定期航路の通り唯一の島

アジア大陸の極東端に位置する我が国は、四方を海に囲まれ6,800余の島々
がほぼ3,000 km以上にわたって大陸と並行して飛石のように連なる弧状列島
を形成している。この列島の東西南北方向にも異国と対峙する国境の海が広が
る最果ての地がある。日本最北端の地は北方領土を形成している択捉島最北端
のカムイワッカ岬で、東経148度45.5分、北緯45度33.3分の地である。北方領
土は北海道に所属するが領土問題の解決をみていないため、ロシアのサハリン
州南端クリリオン岬と宗谷海峡を隔てて約34 kmの距離で対峙する稚内市の宗
谷岬に、一応、日本最北端の碑が建立されている。日本最南端の地は東経136
度5分、北緯20度25分に位置する沖ノ鳥島で、東京から南南東方に約1,740 km
離れ、周囲何百キロも島のない絶海の孤島である。ちなみに沖ノ鳥島は長さ約
11 km、面積約7.6 km²の珊瑚環礁で、そこには北小島と東小島と呼ばれる壘
4枚半ほどの広さを有する2つの場所はあるが、高さ1 m程海面から出ている
小島の周囲は消波工ブロックとコンクリート床で補強されていて、実際には上
陸が難しい無人島である。しかし陸地から200海里（約370 km）までの海域を
排他的経済水域とする視点からは極めて重要な意義を持っていることから、北

小島には2005年6月には、「東京都小笠原村沖ノ鳥島1番地」という住所を明記した看板が設置された。また船舶の航海安全のための灯台設置や島保全のためのサンゴ礁増殖研究などの試みが検討されている。なお有人島での日本最南端島は沖縄本島から南西方に約490 km 離れた波照間島で、島南端部の高那崎の断崖に日本最南端の地を示す石碑が建っている。日本最東端の地は東経153度58分、北緯24度17分30秒に位置する南鳥島で、東京から東南方に約1,950 km 離れた太平洋上に浮かぶ絶海の孤島である。気象庁、海上保安庁、防衛庁からの34名程の人達が常駐している南鳥島は、周囲約6 km の正三角形に近い最高海拔7~8 m の平坦な島形で、リーフに囲まれたサンゴ白砂の小島である。日本最西端の地は東経122度56分9.33秒、北緯24度26分44.99秒に位置する与那国島西端の西崎^{いりざき}である。東京から約2,030 km、沖縄本島から約509 km の距離にある与那国島は、東シナ海を隔てて台湾と西方111 km で向かい合うまさに国境の島である。この四方向最端の地で、定期航路（海路・空路）が運航されているのは与那国島だけであり、残念ながら他の最端の地には、一般の人が思い立っての自由な旅で訪れることは難しい。そんな中、2003年7月に海浜環境調査の一環として南鳥島に上陸し、海岸漂着物（漂着ゴミ）の実態分析を試みる機会があった。与那国島と同じく亜熱帯海洋性気候に属し隆起珊瑚礁の島ではあるが、琉球石灰岩や砂岩の断崖絶壁が連続する男性的な海岸線に囲まれ起伏に富んだ地形の与那国島とは、対照的な自然景観を形成している。

2. 巨石文明の浪漫を秘めた海底遺跡と幾何学形状の奇岩・珍岩

国境の島与那国島では、最近、海底にそそり立つ巨大な石造構造物が発見され、巨石文明の浪漫を秘めた海底遺跡の可能性が高いとされる、遺跡ポイントでのダイビングが脚光を浴びている。六角形を東西方向に引き伸ばしたような島形の周囲約27.5 km の与那国島で、島南岸部の新川鼻から100 m 程沖合の海底に遺跡ポイントは没している。新川鼻一帯は、高さ80 m 以上にも及ぶ断崖絶壁が連続する、島で最も峻険な海岸域を形成している。噂の海底石造構造物は東西方向に約100 m、南北方向に約150 m の広さで分布しているという。浅い所では海面下約3~5 m、深い所では海面下約25 m の海底に造形されており、水深の浅い箇所の構造物は、潮流の状態によっては透明度が高いことから、海面からシュノーケリングでも観察できるといわれている。この海底遺跡の謎を秘めた巨石構造物は、1986年に新嵩喜八郎氏（サーウエスヨナグニ代表）に発

見され、初めて世に紹介されている。高さ25～26 m に及ぶ海底の岩礁に、大小様々の平坦なテラス、鉛直に迫り立つ壁面、垂直な角度で切り落とされた階段、溝のように開削された排水路など、どう見ても人の手に加えられて築造された構造物と考えざるを得ないとされている。この分野の第一研究者である琉球大学木村正昭教授らによるたび重なる海底調査でも、高度な石工技術を駆使した古代遺跡説への期待が高まっているが、しかしいまだ、自然説あるいは人工説のどちらであるかの決着には至っておらず、海底遺跡の謎は深まるばかりである。

長年の激しい風化浸食作用によって高さ80 m に及ぶ断崖絶壁が造り上げられ、それが海底に没している新川鼻一帯の地層は上層部に琉球石灰岩層、その下層部に砂岩層が厚く堆積し、頁岩層の挟みも観察される。巨石構造物のように造形がなされた海底の岩礁は、断崖下部の地層から推察すると、新第三紀中新世八重山層群の砂岩層と頁岩層が堆積したものと思われる。一帯の地層の地質学的特徴を最もよく観察できる場所が、新川鼻から北東約3 kmにあるサンニヌダイの断崖展望台である（写真19-1）。1974年5月13日県指定文化財（名勝）に指定されたサンニヌダイの与那国町教育委員会による説明板には次のように紹介されている。

『 サンニヌダイ（県名勝） 四九年五月一三日指定

浸食されて切り立った岩肌は雄大な景観を呈し、東の海に傾斜して広がる千畳岩、北側に威容にして浮かぶ軍艦石等の雄大な眺めは、与那国随一の景勝地である。

岩肌に波打つ深い海は大物釣りが楽しめる絶好の釣り場として、人気がある。

サンニヌダイ一帯は、学術上貴重な「ヨナグニソノギク」「ヒメサヤバナ」「ヤエヤマズコウジュ」の群落地である。

サンニヌダイの南西三五〇メートルの海中に、『球陽外巻、遺老説伝』で「与那国の頓岩」と記録されている「ウブイティディ」（俗称 立神岩）が屹立している。

与那国町教育委員会 』

砂岩・頁岩が堆積して形成された断崖壁面には無数の巨大な亀裂が縦横に走

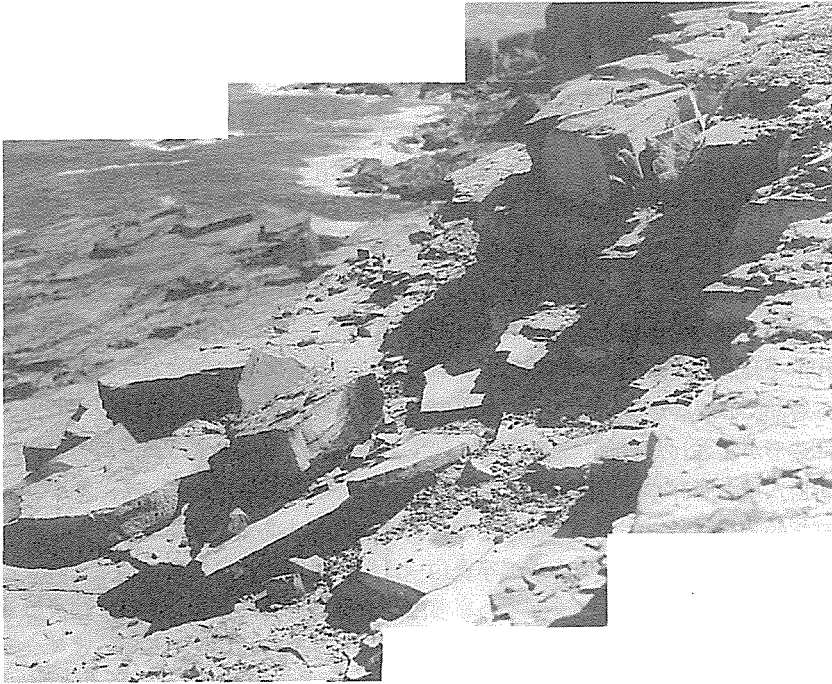


写真19-1 ブロック状節理構造が発達しているサンニヌダイー帯の断崖地層
(1999.4.3撮影)

っており、波浪による浸食作用で巨大な岩塊がブロック状に崩落する特徴がみられる。この幾何学的に発達した亀裂構造はブロック状節理構造といわれ、巨大奇岩・珍岩が造形され易い地層である。八重山層群の砂岩は砂粒子が固結堆積しブロック状に破断する性質のある脆い岩石である。また頁岩はページ(頁)岩と表記しているように、本のページを捲るように剝離する性質があり、細粒の粘土粒子が固結化した泥質岩である。まさに巨大な軍艦岩の中央部分は、左右の岩盤部分を鋭利な切断機で人工的に切り落としたかのように凸形に残っており、直線的な幾何学形状を描いている(写真19-2)。軍艦岩から南西350 mの海中から天空に突き刺すように聳える巨大な立神岩たちかみいぶもまた、ブロック状節理構造の発達した砂岩層と黒潮海流の荒波が創造した奇怪な産物である(写真19-3)。

この立神岩は頓岩(トゥンガン)といわれ、語り継がれている伝説があり、



写真19-2 ブロックが抜け落ちて形成された典型的な奇岩「軍艦岩」(2003.4.7撮影)

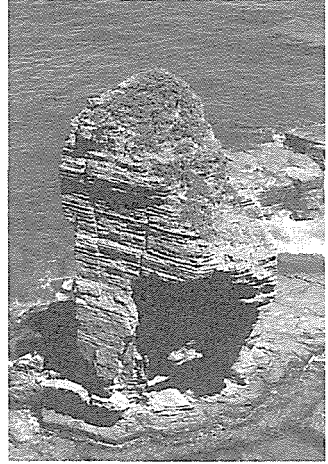


写真19-3 緑のベレー帽を被った「立神岩」(2003.4.7撮影)

池間栄三氏が著した「与那国の歴史」より引用する。

『与那国島の三根崎（サンニ・ヌ・ダイと言う）の外側に一ヶ所高い岩があります。名づけて頓岩（タテ・ガミ（立神）と言う）と言っておりますが、よく海鳥の巣を造るところで、毎日毎日たくさんの海鳥が群とんで参ります。その昔、この土地の若者二人が、この岩に海鳥の卵のあることを知って、ずっと岩のてっぺんまでよじ登って行きました。そして巣の中に産み落としてある多くの卵をうばいとりました。さて、降りようとあたりを見まわすと針の山みみたいな巖石が、とつこつとして四方を包んでどうしても降りるには困難でなりません。二人は心細くなって、あれやこれやとありったけのちえをしぼって考えて見ましたけれども、どうにもこうにも手のほどこし様がありません。とうとう一人の方が勇気を出して無理にも降りようとして、あやまって足を踏みはずし地上へころげ落ちて死んでしまいました。この有様を上から見下していたもう一人の若者は、自分もこれでおしまいかと驚きかなしみ、ぶるぶる体をふるわしておりました。もうこうなったら出来得る限り神様のお力をおかりする迄だと思い、天上を仰いだり地にひれふしたりして泣きわめいて神様にお願いして居りました。暫らくしている中、お腹はぺこぺこになるし、からだは綿のように疲

れ切って何時の間にか、そこへ寝こんでしまいました。そして幾時間の後ハット夢からさめて、あたりを見まわして見ると不思議にも自分は三根崎の地へ来て、からだには、かすり傷一つもうけておりません。若者は大いに喜んで神様にお礼を述べて無事に家に帰ってくる事が出来ました。

このことがあってから後、人々はこの岩を尊んで神岩といいました。現在でもこの頓岩の前をゆききするときは必ずかぶりものを脱いで通るといふことです。(遺老説伝より)』

まさに伝説のように、今も断崖上から立神岩を見下ろすと、そそり立つ岩の天頂部は緑のベレー帽を被ったように鬱蒼と繁茂する草木で覆われ、海鳥の絶好の産卵営巣地に見える。サンニヌダイから新川鼻にかけての断崖絶壁で、物差しで測ったように自然が創造した幾何学的景観を眺めていると、海底遺跡のように、当然、この幾何学的造形が海底の岩礁まで続いても何ら不思議とは思えない感覚になる。

3. 巨石文化の謎を秘めた石盥

巨大奇岩・珍岩が林立する断崖や古代遺跡の期待を秘めた海底岩礁の基岩である砂岩（フルイン）は、往時から与那国島の先人達によって、巨大な石盥（イシタライあるいはイチタライ）に加工され、生活必需品として利用されていた（写真19-4）。この石盥は、砂岩の大岩を円形あるいは方形などの形状に研削・成形し、容器のように内部を掘り抜いた「石掘りの水溜め」である。「石盥」については、既に今から40年以上前、琉球新報（1962.6.7発行）に

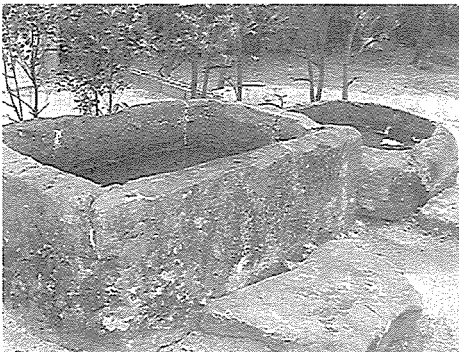


写真19-4 巨石文化の謎を秘めた巨大な石盥（2005.3.28撮影）



写真19-5 用途に応じて多様な形状・大きさの石盥が造られた（2001.3.31撮影）

“興那国に巨石文化，金子講師が発見，石掘りの水だめ”の見出しで取り上げられ注目されていた。当時，東京都立大学講師で民俗学者の金子エリカ先生が，与那国島をはじめ八重山諸島の島々を調査で回り，与那国島で縦2 m，横1.5 m，深さ1 m余の珍しい石掘りの“水だめ”を見つけ調査の結果，「これは巨石文化の遺物」であると文化財保護委員会に報告，注目されたものである。

今も，祖納，比川，久部良地区などには，人家の庭先や軒下，空地などに，大小様々な大きさの石盥が残っている（写真19-5）。大きいものは子供5，6人が同時に入浴できるような，重さ数トンはある巨大な石盥もみられる。形状も丸形，楕円形，瓢箪形，方形などがあり，また掘り抜いた深さも深いものから浅いものまで用途に応じて種々に加工されている。これらの石盥は用途も多様で，飲料水をはじめ家畜用水などの水を貯留するための石造容器として使用された重要な生活必需品であった。通常，各家庭では，大小2個以上の石盥を保有し，大きい石盥は母屋の上手（カンダ）に設置し，屋根や樹木に降った雨水を樋を引いて集水し，飲料水として使用する貯水槽に利用していた。また集落共同の掘り抜き井戸の周囲に設置して汲み上げた地下水の貯留，特殊な信仰施設として造られる池（イキ）や防火用水のタンクなどの用途にも使用されていた。飲料水用の石盥などには日覆のため大名竹で編んだすのこなどを被せていた。中型の石盥は母屋の前に据え，手足を洗う水槽として使用していた。浅く掘られた石盥は髭を剃る髪を削ぐときの水桶代わりに用いられた。小型の石盥は牛馬・豚などの家畜の餌入れ容器や水桶，作業衣や布・サラシ洗い用，芋等の野菜洗い用などの容器として使用された。このように石盥の用途は広く，大きさや形状などによってその用途は決められていて，ウンティ洗い石盥，ハン洗い石盥，ワース石盥，ツェダキン石盥などのように用途に応じて名称も付

けられていたという。

しかしこの石盥に関しては謎も多い。誰が、いつ頃、何のために製造するようになったのか、その起源、発想、動機などに関する詳細な情報は不明のようである。また木遣で運んだとされているが、車両や重機材のない当時、砂岩の巨石を採石した場所も含め、数トンもある巨大な石盥を、何処でどのように加工して、どの程度の人数でどのような方法で集落まで運搬したのか、よくわかっていないようである。

4. 先人達の苦勞が偲ばれる石盥

与那国島の石盥とほとんど同じ用途と機能で造られた「トゥージ」といわれる巨大な石の水瓶（大きいものは直径2 m、高さ1.5 mの石臼型）が、沖縄県粟国島あぐにの人家や空地にほとんど利用されずに今も放置されて残っている（先の第9章に詳述）。石盥の砂岩と同じく岩石学的には石工し易い軟岩に分類される凝灰角礫岩を掘り抜いて造っており、雨水や地下水を溜めるための水瓶である。粟国島では、往時、保有する「トゥージ」の大きさと個数が家の財力を象徴するものになっていて、父から長男へ代々受け継がれてきたとされている。与那国島祖納地区の浦野墓地では、巨石文化を連想させる独特の墓石群が鎮座している。中には巨大な墓石や高度な石積み技術を施した墓石などがある（写真19-6）。また住宅街には、琉球赤瓦屋根の屋敷を取り囲むように、丹精に組積みした昔からの重厚な琉球石灰岩の石垣をよくみかける（写真19-7）。石盥の大きさや個数を含め、石造建造物の巨石化は、往時の資産力や貧富の差が生活様式に現れたものと推察される。

与那国島では、1959年に初めて久部良地区に井戸や洞穴地下水を利用した簡



写真19-6 与那国島では大規模な石積み壁の墳墓が築造されている（2004.3.21撮影）

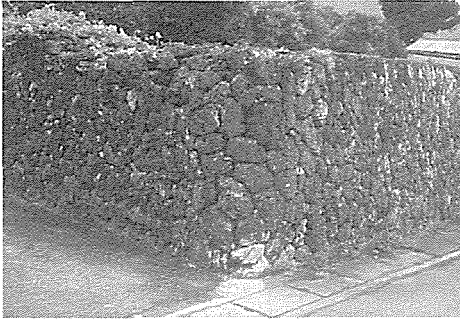


写真19-7 重厚な石垣が取り囲む
赤瓦屋根の家屋が建ち並
ぶ祖納集落（2004.3.22撮
影）

易水道が敷設され、1960年には祖納地区に普及している。島全域に簡易水道浄水施設による清浄水の供給システムが完成したのは1980年とされている。簡易水道が普及する1950年代以前までは、生活用水はもっぱら、雨水、掘り抜き井戸から汲み上げた地下水、洞穴湧水などであったことから、それまでは、石甕は水溜めタンクとして大いに活躍していた。しかし水道水の普及が進むにつれて打ち捨てられ石材に利用されたもの、軽量で持ち運びの容易なプラスチック製タンクに取って替えられ放置されたもの、邪魔で不用となって破壊されたものなど、与那国島の生活史が深く刻まれ日常生活の必需品であった多くの石甕は、時代と共に見捨てられてきたように思われる。石甕は、与那国島特有の風土から生まれた文化財としての価値に加え、先人達が知らしめる「水の大切さ・尊さ」を今に伝える意味からも極めて重要な意義を持っているといえる。石甕を貴重な文化遺産として保存する活動に取り組んでいる池間苗氏の与那国島民俗資料館（祖納）の庭には、種々のタイプの興味深い石甕が集められ展示されている。だが、まだ人家の庭隅に残されているものも多く、放置され苔むした石甕の保存が期待される場所である。

<フィールドガイド>

・与那国島までは、石垣島の石垣港（水・土曜日運行）からフェリー与那国で久部良港まで約4時間、久部良から定期バスで祖納まで約15分、祖納バス停から民俗資料館まで徒歩で約5分。あるいは石垣空港から航路で与那国空港へ約30分、与那国空港から定期バスで祖納までは約5分、祖納バス停から民俗資料館まで徒歩で約5分。

<訪調年月日>

①1995. 8. 4 ②1999. 4. 3 ③1999. 8. 12 ④2001. 3. 29～31 ⑤2001. 8. 2 ⑥2002. 4.

2 & 3 ⑦2003. 4. 7 ⑧2003. 8. 6 ⑨2004. 3. 22~24 ⑩2004. 8. 7~9 ⑪2005. 3. 25
~28

(2003.11. 4 草稿・2004.10.23推敲・2006. 5. 5了)

20章 与那国島の人減らし断層「久部良割」の戦慄と人頭税

1. 妊婦減らしの恐怖の割れ目「久部良割」

八重山諸島に属する与那国島は我が国最西端の島で、東シナ海を隔てて台湾と111 kmの距離に位置している。東京からは、那覇、石垣島と乗り継いで空路約2,100 kmに及ぶ。平坦なサンゴ白浜に囲まれた島々の多い沖縄で、断崖絶壁の峻険な海岸地形の発達した国境の島である。何故か晴天でも年に数回しか台湾を眺望できない与那国島で、その島影を最も美しく望める機会の多い場所が、島西岸部の久部良港東端に広がる海沿い高台の岩原である(写真20-1)。一帯はクラブルスン(久部良古石)と呼ばれる黒っぽい岩礁地帯で、東シナ海の長年の荒波で浸食された断崖地形が形成されている。堆積する八重山層群の砂岩の地表面には幾本もの長い断層亀裂が幾何学模様状に海沿いまで交差し、複雑な地層構造が発達している。その一角で、一際目を引く岩礁の割れ目が波

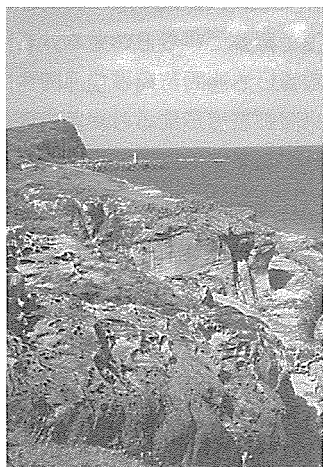


写真20-1 国境の島与那国島久部良の断崖からは、年に数回台湾の島影が眺望出来る(2004.8.9撮影)



写真20-2 妊婦を強制的に跳ばせて「人減らし」が行われたと語り継がれている「久部良割」断層(2004.8.9撮影)

打ち際まで延びている。ごつごつした岩礁の上から、垂直な狭い壁に挟まれた割れ目の地底を覗き込むと、深さ7～8m程であるが、何故か異様な恐怖を感じ、足のすくむ思いがする（写真20-2）。この岩礁の割れ目は「久部良割（クブラバリ）」と呼ばれ、人頭税制時代の島の悲惨な歴史を刻み込んだ断層であるという。

人頭税は17世紀初頭、侵入した薩摩藩が琉球王府に強制した年貢より始まった税といわれている。薩摩藩の支配下で窮乏した琉球王府が、1637年、これまでの石高に割り当てていた年貢を人頭に割り当てることに制度化したのが人頭税制の始まりのようである。宮古と八重山諸島の両先島諸島に賦課された、世界的にも類例を見ない冷酷無残な悪税といわれている。税は現物払いで、数えて15～50歳の男は穀物を年貢として納めることを、女は織物を年貢として織ることが義務付けられていた。明治政府による琉球処分（廃藩置県）断行で沖縄県となった後もこの税制度は残り、250年以上の長きにわたり続き、1903年（明治36年）によりやく廃止されている。このクブラバリの断層には、苛酷な人頭税に喘ぐ島民が人減らし策として妊婦を跳ばせたという戦慄の走る非人道的な伝説が秘められている。

クブラバリ帯は1974年5月13日県指定名勝になっており、今は純国産馬の与那国馬がのどかに草を食む夕日が映える高台である。説明板には次のように紹介されている。

『 県指定名勝 久部良バリ帯 昭和49年5月13日指定

ここ久部良バリを中心とした帯は年中青々とした芝生で覆われ、晴れた日には台湾が望みできる景勝地で、風光明媚な恩納村の万座毛に匹敵する。久部良バリの割れ目は全長約15m、幅広いところで約3.5m、狭いところで約1m、深さ約7mある。

その昔、中山王府は先島の人口を調査して、これまで石高に応じて納めさせていた貢租を人頭割りに改めたが、その影響は与那国島までおよび、村ではこの久部良バリを使って残酷なことが行なわれていたという。それは人口制限のため村々の妊婦を集めてこの岩の割れ目を強制的にとびこえさせたのである。丈夫な妊婦は必死の思いでとびこえたといわれるが、そうでないものは流産をするものや、なかには転落死するものもいたと語り伝えられている。

なお、この地域において許可なく現状を変更することは、県条例で禁じられています。

沖縄県教育委員会 与那国町教育委員会 』

沖縄本島^{おん な そん}恩名村^{まん ざもろ}の万座毛は、18世紀前半、琉球国王^{しゅうけい} 尚敬^{ほくごん}が北川巡視の途中で立ち寄った際、「万人を座らせるに足りる」と称賛したと伝えられているほどの断崖景観であるが、クブラバリ一帯の断崖もまたそれに匹敵する景勝地で、島東岸部に所在し奇岩・珍岩^{あがりざき}が連続する東崎やサンニヌダイなどと共に島を代表するビューポイントである。この断崖に立ち東シナ海を望むと、昔から島民が紺碧の水平線を眺望し、隣国に思いを馳せながらやすらぐ場所であったと思われるこの地の割れ目が、何故、残酷な人減らしの伝説を生み出すことになったのか、まったく想像し難い思いにかられる。しかしこの悲惨な伝説を知りこの断層の前に立つと、風光明媚な情景は一瞬にして目頭から消え、ただ無言のまま考え込まされ、割れ目が物語る恐怖に立ちすくんでしまう。かつては割れ目には海水が流れ込んでいたとされているが、今は、割れ目に覆い被さるように草木が生茂って溝奥は薄暗く、岩塊が点在して地底の様子がよく窺い知れないのが、かえって不気味さを駆り立てている。近づくと思ったより割れ目の幅は広く、跳び越えられるかもしれないとの予想を裏切る。ここに観光で訪れた多くの人達もきっとこの割れ目を目の当りにすると、悲惨な伝説からくる恐怖心が先に立ち、跳び越えに挑戦する気などは微塵も生まれてこなくなる。実際、割れ目の大きさは若い婦人はおろかスポーツ万能で健脚な青年男性ですら跳び越えることのできそうにもない割れ目幅である。もしも島中の妊婦を集めてクブラバリの前に立たせ、強制的にこの割れ目を次々と跳ばせたならば、無事に跳び越えられる妊婦はいなく、溝深くに転落した妊婦は腹の中の子供と共に死に至るか、運よく助かったとしても子供は流産の運命をたどったと思われる。多くの家族・親族がクブラバリの割れ目を取り囲み、その悲鳴と怒号が紺碧の東シナ海に響き渡る、まさに一帯は生き地獄に化したと推察できる。

2. 冷酷極まる非道な人頭税

クブラバリの妊婦減らしにまつわる逸話は伝説なのでその真偽のほどは定かではないが、今なお真実味をおびて語り継がれているのは、250余年もの長きに及んだ人頭税制は足腰が立たなくなるまで島民から搾り取った税で、死に至

るまで搾取された苛酷な課税への恨みつらみの現われともいえる。往時は、毎年の負担税の総額は個人ごとではなく集落や島ごとに定められていたので、15～50歳の男女の人口が多いほど1人当たりの負担額は少なくなるはずである。総額を頭割りすることから、1人当たりの人頭税を減らすには、人口の増加を図ることが重要である。それなのに何故、奈落の底に妊婦を転落死させる人減らし伝説が真実味をおびて語り継がれてきたかの理由については、池間栄三氏による「与那国の歴史」の一節に記述されているように思う。

『この非道の人口調節を行ったのは、納税者と収穫量との均等を保つためであったと思われる。即ち限りある土地に限りない人頭の増加を恐れたからである。当時の百姓がいかに血みどろになって、水田を開拓していたかは、今日、風害、潮害のために、或いは不利不便のために、耕作を放棄して、牧場や原野になっている所にある無数の廃田の跡を見ても分かる。このように山野を水田化しても、税額に達する収穫は容易ではなかったし、暴風、早魃による減収の補いは、ほとんど絶望に近いものがあったと思われる。しかも、その上の人口増加は百姓は勿論、役人にとっても好ましいことではなかったことは当然である。

この苦難に耐えかねて脱島者も出た。比川部落の浜川屋、兼盛屋、兼久屋、後間屋の人々は南方にハイ・ドゥナン（南与那国）と言う楽土があると妄信して、その島を求めて脱島した口碑がある……。

（「与那国の歴史」より抜粋）』

非道な人頭税に喘ぐ当時の八重山社会での一つの世相として、青年男女間で適齢期になっても結婚しない風潮が多くみられたという。また結婚しても子供を生みたがらない女性や、妊娠した女性の間でも意識的に流産したり、生まれたばかりの子供を埋め殺しにして間引きしたりする傾向が多くなったとされている。このため琉球王府は人口減少に伴う人頭税収の低減に危機意識を抱き、適齢期男女の早期婚姻を積極的に推奨し、少子化・意識的流産・子供の間引き等の悪行に対して刑罰等を布達して対策を講じたとされている。このような八重山の社会的風潮が一つの背景となって、クブラバリ断層跳び越えの人減らし伝説が真実味をおびて語り継がれてきたのかもしれないと推察する歴史学者もいる。

3. 男減らしの惨殺田「トゥング・ダ」

与那国島にはまた、「トゥング・ダ」と呼ばれる苛酷な人頭税制下で引き起こされた悲惨な人間引きの虐げられた場所が、祖納集落の製糖工場から比川集落に向かう途中で東側に300 m程入った島中央部付近に、実際に残されているという（写真20-3）。かつては四角い約1町歩の天水田で、集落の集会所として利用されていた場所とされている。今は、約3反の広さに分割され、遠く宇良部岳山頂に高い鉄塔を望む雑草の生茂るサトウキビ畑地に変わっており、当時の面影は薄らいでいる。「与那国の歴史」によると次のように紹介されている。

『トゥング・ダは旧島仲部落の前方にある約一町歩の天水田である。その昔、村々から満十五歳以上満五十歳までの男子をこのトゥング・ダに非常召集し、後れてその中に入れなかった不具廢疾者を惨殺したと伝えられている。満十五歳から満五十歳までは、たとえ不具廢疾者であっても、ことごとく納税の義務を負わされていたので、このような悪魔の仕事をしたのである。トゥング・ダの正しい位置は与那国二六七七番地であり、地積は九段三畝〇七歩であるが、今日は分割されて約三段歩位になっている。トゥング・ダはトゥング（一升）ダ（田）の意から一升田と書くが、又トゥ



写真20-3 人頭税制下、悲惨な人間引きの虐げられた場所と伝えられている与那国島の「トゥング・ダ」（2003.4.7撮影）

（人）ング（舛）ダ（田）の意から人舛田とも書く。それからトゥ（人）ング（罫で縛る）ダ（田）即ち人を罫にかけて縛る田と言う意味もある……。

（『与那国の歴史』より抜粋）』

先のクブラバリは妊婦の女性であったが、トゥング・ダは島の男性をターゲットに、鐘を鳴らして突然召集し、自足で時間内に田に入れなかったものを人頭税軽減の人減らしのために惨殺したという悲惨な歴史を刻んでいる。「トゥング・ダ」という名称の陰湿な意味からも察知できるように、「百姓は人とみなされず単なる労働力にすぎず、税を貢ぐ労働力を提供できなくなった自足不能な病人や不具者は不要者で殺してしまえ」という、人としてあるまじき異常なまでの陰惨な思想が、当然のようにまかり通っていたことが、悪名高い人頭税の残虐非道性を裏付けている。

4. 宮古島で今も立ち続ける人頭税石

250余年もの幾世代にもわたって宮古・八重山地域のみ島民に死ぬ思いの苦しみを賦課した人頭税制の存在は、宮古島では「人頭税石」と呼ばれる高さ143 cmの「石柱」の形で残っており、往時の重税の苛酷さを今に伝承する象徴となっている（写真20-4）。島西岸部に位置する市の中心街から北に向かう



写真20-4 250余年も立ち続けている宮古島平良市の人頭税石（手前の石柱）（2003.8.16撮影）

海岸沿い通りの人家の門先にぼつんと立っている。周りは花壇や芝生になっており、注意を払わなければ見過ごしてしまいそうな、何の変哲もない琉球石灰岩の石柱である。しかし当時、15歳以上で背丈がこの石柱（143 cm）を超えると、男には主に粟を女には宮古上布を納めるよう義務づける、所謂、島民にとっては人頭税の賦課を判定する基準の物差であったことから、近寄り難い石柱であったと思われる。説明板には次のように記述されていた。

『 人頭税石（にんとうぜいせき）

大正10年に宮古を訪れた民俗学者・柳田國男は、「海南小記」の中でこの石柱を「ぶばかり石（賦測石）」と称し、「この石で背丈を測って石の高さに達すると税を賦課された。」と伝承を紹介しています。

1637年、琉球王府は先島（宮古・八重山）に人頭税制を施行しました。この税制は頭数（人口）を基準に税（粟・織物）を賦課するもので、役人の見立てにより税を納めさせられましたが、1659年には、頭数の増減に関係なく「定額人頭税」制となり、更に、1710年には年齢（15歳～50歳）を基準として税（男は穀物、女は織物）の賦課が行われるようになりました。

この人頭税制は1903（明治36）年1月1日の新税法施行に伴って廃止されました。何故、この石柱が「ぶばかり石＝人頭税石」と呼ばれたのかは定かではありませんが、人頭税が年齢制になる以前、即ち、役人の見立てで税を賦課されていた頃、或いは、それ以前に「あの石の高さほどになると、税を賦課される」という目安のようなものであったかもしれません。今日、この石柱については「人頭税石」のほか、「屋敷神」「陽石」「図根点」など、多くの説が出されています。

平良市経済部商工観光課 』

島民を石柱の脇に立たせて背丈を賦測の際に、少し離れた所から見比べていたように思われる石柱から2 m程離れた所に、往時、役人が腰を掛けて賦測ったと思える琉球石灰岩の岩塊が2個程地表から顔を出している。その岩に腰を下ろして、250年以上もの長い間立ち続けている人頭税石を見詰めていると、幾万人か、いや幾十万人か、今までどれだけ多くの島の人達がこの前に立ち、物言わぬ人頭税石と背丈を比べ、触り、語りかけたのであろうか想像され、摩滅した石柱頂部の様子からも、島民の苦節の皺が刻み込まれた鈍重さを感じる。



写真20-5 人頭税石を「^{ぶばかりいし}賦淵石」と称した柳田國男氏の石垣島白保海岸に建つ歌碑
(2005.12.26撮影)

ちなみに「人頭税石」を「ぶばかり石」と称した民俗学者の柳田國男氏（1875－1962年）は、大正9年（1920年）12月から翌年2月にかけて、九州の大分から鹿児島を経て、奄美諸島、琉球列島を南下する長大な調査旅行を試み、沖縄、宮古、石垣などの島々に立ち寄っている。後にその成果は「海南小記」としてまとめられ、それが、あの「日本民族の南方渡來說」を提唱する礎となり、やがて30年ほど後に、遺書のような生涯をかけた壮大な構想を綴った『海上の道』が刊行されるに至ったといわれている。石垣島の白保の海岸には、柳田國男氏が大正10年1月に来島した経緯と共に歌を刻字した大きな石碑が2001年12月に建立されている（写真20-5）。

『柳田國男は一八七五年（明治八）七月三十一日兵庫県に生まれた 日本民俗学の創始者で 近代日本の代表的な思想家としても 各分野に大きな影響を与え続けている 柳田國男は大正十年 東京朝日新聞記者として来沖 この旅行は沖縄研究の扉を内外に開き 日本民俗学の形成に重要な意

義をもった「海南小記」はその記録である。石垣島に来島したのは同年一月二十四日で七日間の滞在だったが、その後晩年に至るまで八重山の文化を紹介し、民俗・芸能の宝庫として全国に知らしめた。また八重山出身の研究者も育てた。碑文の歌は石垣島を去った直後の二月一日現地の新聞に掲載された。大学生の時に愛知県伊良湖岬に流れ着いた椰子の実を見た体験と、沖縄で見た宝貝は、その後大きなモチーフとなって、晩年の壮大な著作「海上の道」となった。椰子の実と宝貝は、日本民族の由来と海を渡って文化を伝えた名もない人々の生活に思いをはせた柳田國男の民俗学を知るための重要なキーワードである。

一九六二（昭和三七）八月八日 八十八歳で死去した

二〇〇一年（平成一三年）二月一六日 柳田國男歌碑建立期成会
揮毫 豊平峰雲 刻字 崎山寛樹 』

5. 自然の造形物に潜む陰

宮古・八重山の先島諸島（宮古8島、八重山31島（内、現在有人島12島））の島民のみに1637年から賦課された人頭税制は、1879年（明治12年）の琉球処分で沖縄県となった以降も、旧支配層に配慮する明治政府の「旧慣温存」策によって廃止されず24年間も存続し、1903年（明治36年）にやっと、宮古農民の撤廃運動が起爆剤となり廃止されている。筆舌に尽くし難い冷酷非道な人頭税制に耐えて生活基盤を築き上げ、島の発展史を支えてきた先人達の歩んできた苦節の道は、廃止後100年を経た現世代にも生き続けており、与那国島の祖納集落などには廃止記念碑が2003年1月に建立されている。

『 人頭税廃止百年記念の碑

近世から明治の後期に至るまで両先島（宮古・八重山）には、各個人に頭割りに課した人頭税があり、私たちの先人はその不合理で苛酷な税制のもとで苦境にあえいでいた。宮古島における先覚者らによる人頭税廃止請願運動の盛り上がり、沖縄県土地整理事業の完了により明治36年（一九〇三）一月一日から新税法に移行し、人頭税は廃止となった。それを記念して八重山では郡民あげての祝賀会が催された。

人頭税廃止百年に当たり、先人の苦労を後世に伝えると共に、その歴史的意義に鑑み、ここに記念碑を建立する。

二〇〇三年（平成一五年）一月一日

八重山人頭税廃止百年記念碑事業期成会 』

竹富島^{たけとみじま}には、廃止百年に当たり当時の和歌をもって、先人達の苦勞と功績を偲ぶために、仲筋集落のソブフルの丘に記念碑が再建されている。

『

新税法實施記念碑

日の本を 照らす光はてんか下 曇らぬ御代そ とう登りかり
 氣留

明治癸卯一月創立 』

珍岩・奇岩など自然が創生する大地の造形美の世界には、壮大な感動や限りない浪漫を感じ、神秘的な偉大さや無限さなどを喫食したような心豊かな気分になる。しかしクブラバリの岩の割れ目、トゥング・ダの畑地、人頭税石の石柱を見ていると、同じ自然の造形物にかかわっていることなのに、何故か心に巨大なブラックホールでもできたかのように、^{おもし}重石で圧迫された切ない気分になる。大地が織りなす素晴らしい造形美や芸術美も、人や歴史とのかかわりでそのイメージが大きく変貌することに気付かされる。

<フィールドガイド>

- ・与那国島までは、石垣島の石垣港（水・土曜日運行）からフェリー与那国で久部良港まで約4時間。あるいは石垣空港から航路で与那国空港へ約30分。
- ・与那国島のクブラバリの断層までは、久部良港から港東端高台まで徒歩約10分。あるいは与那国空港から定期バスで久部良港まで約10分、港から港東端高台まで徒歩約10分。
- ・与那国島のトゥング・ダの畑までは、祖納集落から島南岸部に所在する比川集落方面へ向かって徒歩約30分、途中から東方向に折れて約300m。
- ・宮古島の人頭税石の石柱までは、宮古空港から平良市の西岸部市街地方向にタクシーで約20分。

<訪調年月日>

- ①1995.8.5, 1999.8.12, 2004.3.21・24, 2004.8.5・8.9（与那国島のクブラバリー帯）
- ②2003.4.7（与那国島のトゥング・ダ）
- ③2003.8.16（宮古島平良市の人頭税石）
- ④2005.8.15・2005.12.26（石垣島白保海岸の柳田國男石碑）

(2004. 3. 11草稿, 2004. 7. 10推敲, 2006. 5. 5了)

21章 宮古・八重山諸島の不思議な大岩「津波石」

1. 日本列島の宿命津波地震の脅威

地球表面をリングの皮のように覆っている厚さ10~100 kmの岩板はプレートと呼ばれている。地球の陸地や海底は不連続な十数枚のプレート上に形成されており、陸地が乗っている陸プレートと海底を形作る海洋プレートに大別される。各プレートは年間数 cm の速度で絶えず移動や潜り込み現象を起している。地震は互いにプレートがせめぎ合う境界面で活発となる。日本列島はユーラシア、北米、太平洋、フィリピン海プレートの4つのプレートが複雑な滑動でひしめき合う交差地帯に立地していることから、我が国は、移動・潜り込みでプレート境界面が崩壊して震源となる「プレート境界型地震」の頻発する、世界でも有数な地震国である。

大地震が海底地下の浅い所で発生すると、海底の地形が上下方向に急変して海面を持ち上げ凹凸面が形成される。これが長波となって海洋を広く伝播したのが津波といわれている。特に震源が海底にあって地下20~40 kmより浅く、マグニチュード(M) 7.5以上の場合は大津波を警戒する必要がある。震源近くに離島や半島・陸地があると、瞬時に大津波に襲われる可能性もある。津波が伝わる速度は水深に左右され、水深10 mでは時速30 km程度であるが、水深200 mならば時速160 km、水深5,000 mならば時速800 kmと新幹線やジェット機並みの速度で押し寄せて来るとされている。また津波の波高は陸地や海底の地形に影響を受けるが、一般に、上陸直前には、後ろからの速い波に押し出される形になるため、急激に高くなるといわれている。

2004年12月25日午前7時58分、インドネシアのスマトラ島沖で発生したスマトラ沖地震での巨大津波は、筆舌し難い未曾有の超巨大災害をもたらし、世界を津波の恐怖で震撼させたことは、世界中の人々の記憶に生々しく植えつけられている。震源となったスマトラ沖には水深7,000 mを超えるスンダ海溝があり、その海溝に沿って断層が激動し、マグニチュード(M) 8を超える大地震が繰り返されて巨大津波が発生したと考えられており、スマトラ沖地震は阪神・淡路大震災の約1,600倍のエネルギーに相当する巨大地震と解析されてい

る。幾度も襲来する大波はインド洋沿岸を次々と呑み込み、タイやスリランカなどインド洋全域に広がり、アフリカ東岸や南極まで達し、死者・行方不明者の数は30万人を超える空前絶後の被害をもたらした。

近年の我が国では、波高10 m 以上の津波が秋田県沿岸を襲い104人の犠牲者を出した日本海中部地震（ $M = 7.7$, 1983年5月26日）、波高30 m 近い大津波が奥尻島に襲来し犠牲者230人を出した北海道南西沖地震（ $M = 7.8$, 1993年7月12日）などは悲惨な津波地震として記憶に新しい。チリ地震津波（ $M = 9.5$, 1960年5月24日）では、地球の裏側南米チリ沖で発生した地震による津波が太平洋を渡り、地震発生の約22時間後に約17,000 km 離れた日本沿岸に襲来し、日本国内で142人の犠牲者と行方不明者を出している。遙か遠方の地震でも甚大な津波被害が発生することへの厳しい教訓を与えた津波地震である。我が国最大の津波被害は明治三陸地震津波（ $M = 8.5$, 1896年6月15日）で、いわゆる“津波地震”といわれている。地震は弱かったが、波高38 m 余の大津波の襲来によって三陸沿岸の被害は激甚を極め、犠牲者約22,000人、家屋流失10,000余にも達したと記録されている。この明治三陸地震津波では、後に地震規模の25倍の強さで津波が観測されたと解析されている。そのため、通常、地震が大きいと津波も大きいのが、地震は大きくないのに津波が大きくなる津波地震の典型的な例とされている。このような地震国日本の津波災害の経緯から「津波」は「TSUNAMI」として世界共通の単語にもなっている。

2. 明和大津波が八重山・宮古諸島を呑み込む

今から230余年前に起こった八重山大地震では、世界史上類例を見ない規模の大津波が発生し、八重山・宮古諸島の島々が潰滅するほどの想像を絶する津波被害に襲われている。明和8年3月10日（西暦1771年4月24日）辰の刻（午前8時頃）琉球列島に大地震が起こった約1時間後、八重山や宮古諸島などを大津波が直撃し、人畜・家屋・田畑に甚大な被害を与えた。地震の規模はマグニチュード7.4、震源は東経124.3度、北緯24度で石垣島の南南東沖合40 km といわれている（図21-1）。地震より津波による被害が甚大だったことから、この地震津波は“明和大津波”と呼ばれている。

八重山諸島では、地震が止むと直ちに東方海上に雷鳴のような音が轟き、稀有の大干潮の怪現象が起こったと思う間もなく、東南海上から黒雲のような大津波が3度にわたって襲来したそうである。特に石垣島での津波の高さは1度

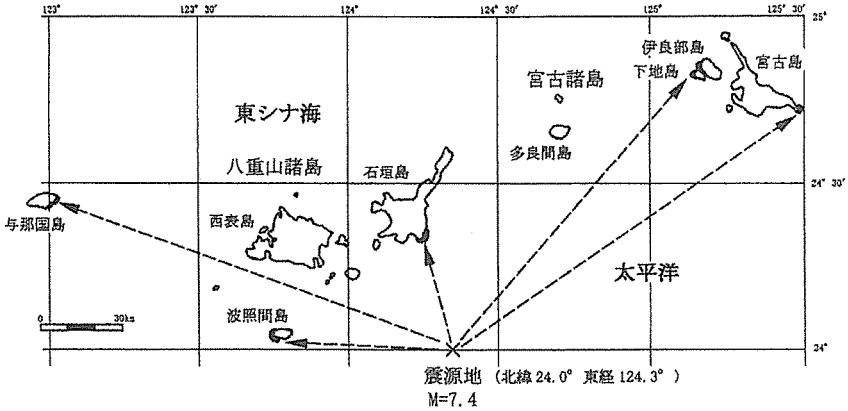


図21-1 沖縄県八重山・宮古諸島を飲み込んだ明和の大津波（1771年）の震源地と今も残る津波石の主な海岸域

目が28丈（84.8 m）或いは20丈（60.5 m），2度目が25～26丈（75.7～78.5 m），3度目が2～3丈（5～9 m）で，1度目の波高84.5 mの津波は有史上世界最大といわれている。八重山諸島での大津波による溺死者は9,313人で，当時の総人口は28,992人であったことから実に32.22%の人々が犠牲になり，殊に激甚をきわめた石垣島では8,815人を数えたと記録されている。現在，石垣市宮良のタフナー原には，当時の八重山諸島での犠牲者の冥福を祈り，合わせて未曾有の災害の歴史が永く後世に語り継がれていくことを祈念して，「明和大津波遭難者慰霊之塔」が建立されている（写真21-1）。そこには八重山諸島での災害関係諸記録が碑文と共に纏められている。

『 碑文

八重山の古記録大波之時各村之形行書によれば 乾隆三十六年（日本年号明和八年）三月十日（一七七一年四月二四日）午前八時ごろ大地震があり それが止むと石垣島の東方に雷鳴のような音がとどろき 間もなく外の瀬まで潮が干き 東北東南海上に大波が黒雲のようにひるがえり立ちたちまち島島村村を襲った 波は三度もくりかえした 史上有名な八重山の 大津波である

津波は石垣島の東岸と南岸で激甚をきわめ 全半潰あわせて十三村 ほかにか黒島 新城二村が半潰し 遭難死者は九三一三人に達した



写真21-1 八重山諸島石垣島宮良のタフナー原に1983年4月建立された明和天津波遭難者慰霊塔（2000.8.6撮影）

こうして群島の政治 経済 文化の中心地石垣島は壊滅的打撃をうけ加えてその後の凶作飢餓 伝染病などによる餓死者 病死者も続出して人口は年年減少の一途をたどり 人頭税制下の八重山社会の歩みを一層困難なものとしその影響はまことに計り難いものがあった

この天災から二一二年 狂濶怒濤のなかで落命した人人のことを思うとき いまなお断腸の念を禁ずることはできない このたび有志相謀り 群島全遭難死亡者のみたまを合祀してその冥福を祈り あわせてこの未曾有の災害の歴史が永く後世に語り継がれていくことを祈念し 島内外各面の浄財を 石垣市 竹富町 与那国町並びに諸機関 団体の御協力を仰いでここにこの塔を建立した

一九八三年（昭和五八）四月二四日

明和天津波遭難者慰霊碑建立期成会

明和天津波災害関係諸記録抜粋

地震の規模と位置（東京天文台編理科年表による）

M（マグニチュード）七・四 震源地東経一二四・三度 北緯二四度
「八重山地震津波」と記録（石垣島白保崎南南東四〇キロメートルと

測定される)

津波の状況 (大波之時各村之形行書による)

石垣島で「潮揚高貳拾八丈 (八四・八メートル) 或貳拾丈 (六〇・六メートル) 或貳拾五 六丈 (七五・七~七八・七メートル) 或貳 参丈 (六~九メートル) 沖ノ石陸へ寄揚 陸ノ石並大木根乍被引流」とある

災害の状況 (大波之時各村之形行書 御手形写御問合控等による)

全潰した村 石垣島の真栄里 大浜 宮良 白保 仲与銘 伊原間 安良 屋良部の計八村

半潰した村 石垣島の大川 石垣 新川 登野城 平得 離島の黒島 新城の計七村

遭難死亡者 総計九三一三人 (群島人口の三二・二二%に当る) 内 石垣島八八一五人 (九四・七% 在番 頭職等の公職者 八八一五人及び蔵元の公用で離島からきて遭難死亡した 三七六を含む) 黒島二九三人 (三・一%) 新城島二〇五人 (二・二%)

住家の全潰 総計二一七六戸 浸水一〇〇三戸

田畑の流失 総計一六四二町四反五畝一二歩

作物被害 田畑総計一七九五町二反六畝一〇歩

その他の流潰流失 蔵元庁舎 村番所一三棟 会所四棟 御嶽十四棟 橋梁六座 桃林寺及び同寺の仁王像二軀 権現宮 貢納米等

』

宮古諸島では、波高12~13丈 (36.4~39.4 m) の前代未聞の大津波となって宮古島の友利^{ともり}、砂川^{さるか}、新里、宮国の4村及び多良間島などに襲来し、遭難死亡者2,548人を数えた災害状況を、「平良市史 (第1巻通史編I)」より抜粋して紹介する。

『南西の方から押し寄せてきた大津波は、その前面に比較的リーフ (礁) がすくなく、しかも海岸低地に在った宮国、新里、砂川、友利の四村の集落をまともにおそった。家屋、石垣、樹木はみな洗い流され、多くの人命を失わせた。低平な水納島は大波が人家の上を通っていき、あとに残ったのは石原だけとなったという。その他、池間島の池間、前里の二村、伊良

部島の仲地、佐和田、伊良部の三村、多良間島の塩川、仲筋の二村、総じて十二か村が被害をうけたのである。

波にさらわれた家屋は一〇五四軒、浸水家屋は二五軒で、人命の失われたものは、男一一四九名、女一三九九名、計二五四八名に及んだ（八重山の場合は九千三百余名）。船は七六隻、牛は二三八頭、馬は四〇三頭が失われた。公の家屋は、村番所六軒、織布屋十六軒、藍蔵五軒、船具屋一軒が流され、穀物などはおよそ一〇三町歩相等分、原野は五〇万坪が潮にやられた（『球陽』）。』

このようにはぼ3,000 kmにわたる日本列島の南西端部を占める31島（内、現在有人島は12島）からなる八重山諸島と8島からなる宮古諸島を襲った空前絶後の大津波によって、一瞬の内に、両諸島合わせて11,861人の尊い命が奪われ、家屋の流失全潰は3,200戸以上にも及んだ。明和大津波の悲劇と学んだ教訓を忘れずに犠牲者の冥福を祈るために、石垣市では、毎年、大津波が襲来した4月24日には、明和大津波遭難者慰霊碑之塔で慰霊祭が行われている。この慰霊碑建立の先頭に立って取り組んだ人が、八重山郷土史研究家の牧野清（まきのきよし）氏であった。牧野氏（2000年10月22日没）は大津波の脅威を島の人々に伝えようと、大津波解明のための被害実態の調査に邁進した人であった。海底から陸上に打ち上げられた大岩（「津波石」という）の分布データや民間伝承を根気強く収集し、その成果を琉球王府編纂史書「球陽」や八重山から王府への報告書「大波之時各村之形行書」などの古文書記録と照査して詳細に纏め上げ、労作「八重山の明和大津波」を1968年に自費出版している。これは、その後の明和大津波に関する科学的研究の礎ともなっており、極めて貴重で高い評価を受けている研究業績である。

3. 津波石が今に伝える津波地震の脅威と遺産

230年以上の時を経た今、明和大津波の襲来した痕跡は、八重山・宮古諸島の多くの島々では、不思議な大岩が点在する景勝地に変貌し残っている。前代未聞の大津波が3度にわたって直撃した石垣島の南東岸部に所在する大浜の崎原公園では、海岸から約150 m陸上に往時の津波で打ち上げられた琉球石灰岩の大岩を見ることができる（写真21-2）。形状は直径約10 m、高さ約5 mにも及ぶ大岩で、重さは約780 tと推定されている。今は天頂部に登る階段が設

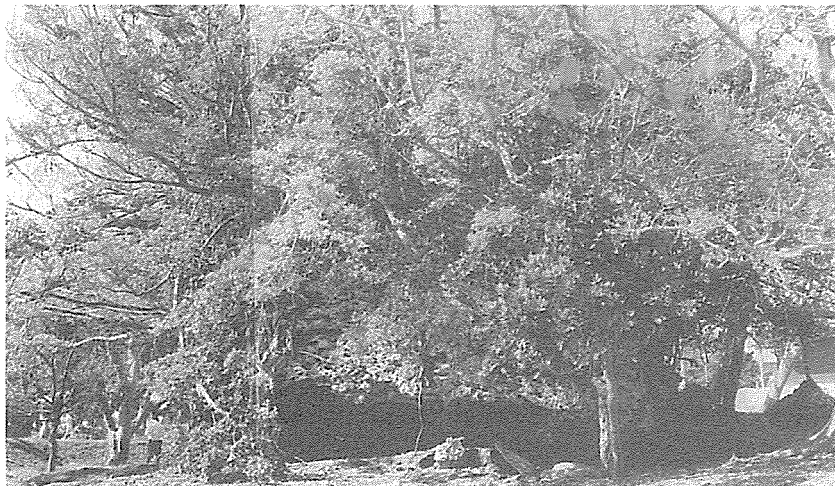


写真21-2 石垣島大浜の崎原公園に今も残る不思議な大岩。明和大海津波（1771年）で打ち上がった重さ約780 tと推定されている津波石で、ガジュマルなどの南国樹木で覆われ、230年以上の時の長さを物語っている（1996.8.8撮影）

置され、大岩の様子が観察できる。往時の津波の悲劇を隠すかのように、ガジュマルなどの亜熱帯樹木に覆われているが、かつては海洋に存在していた証を示すサンゴや貝殻化石を鎧のように纏っており、この大岩は津波によって海底から運ばれて来た「津波石」とされている。津波石であることの科学的立証には、海底にあった頃のサンゴなどの生物が化石となって付着していることから、この化石の年代を放射性炭素の半減期を利用するC¹⁴年代測定法で分析することによって、津波で陸上に打ち上げられた時期、即ち津波の発生時期を調べることができる。それによると、表面部のサンゴ化石は約200年前に形成されていることから、1771年に発生した明和大海津波による津波石とみなされている。最初に訪ねた時（1996.8.8）の打ち上げ状況をスケッチしたメモによると（図21-2）、この巨大な津波石は高さ約2 mのノッチが発達した岩礁先端部から陸側へ約100 m運ばれた海拔5 m程のところに点在しており、岩礁部から砂浜とリーフが続き波打ち際までは60～70 mの距離にあった。特に、石垣島の南東から北東部にかけての島東側の海岸部では、畑地、住居地、道路などに数多くの大小様々な津波石が打ち上げられたといわれているが、その後、ほとん

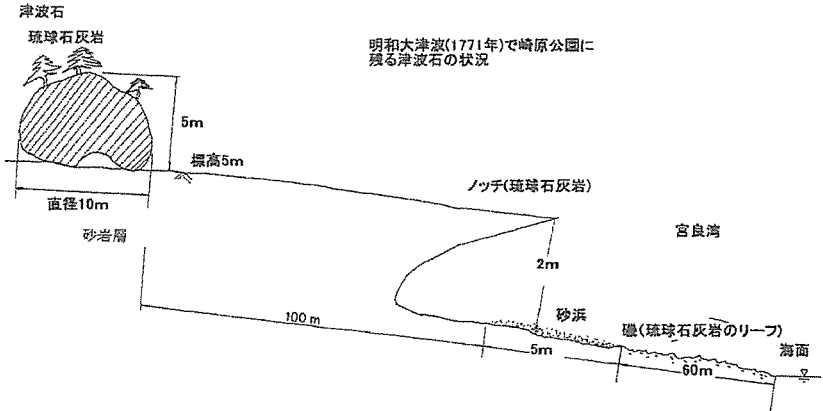


図 21－2 津波石の大岩から海岸までの概略スケッチで、津波石は波打ち際から約160mの陸側に打ち上がっていた



写真 21－3 下地島の巨大な津波石。「帯大岩（オコスゴビジー）」と呼ばれ、高さ12.5m、周囲59.9m、重さ5,000 tと推定される巨大岩で、島建の岩守護神として崇められている（1999.8.19撮影）

どは破壊・粉砕して処分され、一部はコンクリート用骨材やブロック用石材などに利用されたという。

宮古島西方に位置する下地島の海岸には、世界最大と思われる大きさの津波石が明和大海波で打ち上げられている（写真21-3）。この津波石は、海にあったころ浸食でノッチが発達し中央部がやや引っ込んでいて人が帯を締めている姿にたとえられ、帯大岩（オコスゴビジー）と呼ばれている。大岩の高さは12.5 mで4階建てのビルの高さに相当し、周囲は59.9 m、重さは5,000 tと推定されており、津波の破壊力のすさまじさを物語っている。この帯大岩が打ち上がった木泊部落の住民はほとんど溺死し家屋は流失して、押し寄せた大小様

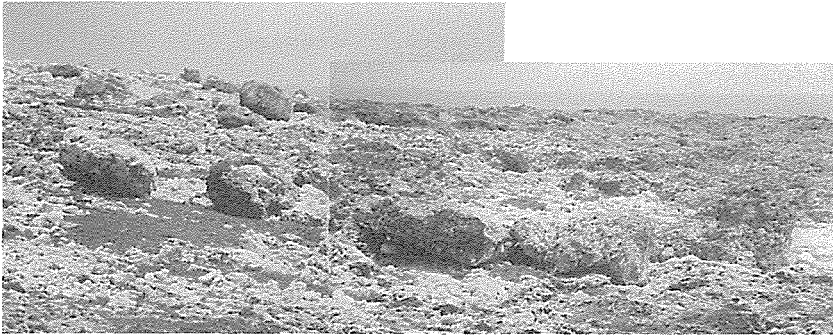


写真21-4 波照間島高那崎の高さ約20～30mの断崖絶壁を乗り越えて海底から打ち上がった津波石群（1999.8.18撮影）

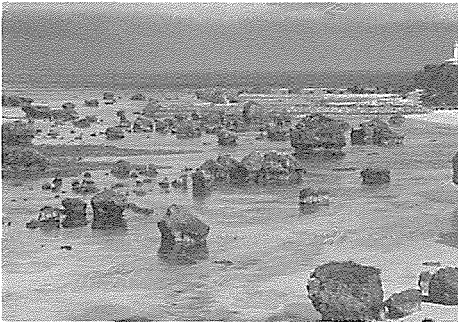


写真21-5 宮古島東平安名崎海岸のリーフに点在する津波石群。沖合海底から明和大津波で運ばれた津波石群が基石を並べたような景観を造り、宮古島最高のビューポイントとして人気が高い（2004.8.20撮影）

様な岩や砂礫によって潰滅したとされている。無数に点在していた大岩は飛行場の滑走路建設に使用するためにすべて爆破され、最大の津波石、「帯大岩」1個だけを島の守護神として残し、大漁祈願祭、航海安全、家内安全の祈願が行われている。

また有人島としては日本最南端島である波照間島では、島南東側の高那崎には高さ20～30 mの垂直な断崖を乗り越えて打ち上がった数多くの津波石が点在している（写真21-4）。東平安名崎^{ひがしへんなざき}と称する宮古島の最東端部の海岸域には、断崖絶壁を乗り越えて陸上まで打ち上がった大岩に加え、リーフ沖合から磯に運ばれた大岩群が基石を並べたような独特の海岸景観を造り上げており、宮古島最高のビューポイントとなっている（写真21-5）。他にも伊良部島の佐和田の浜、石垣島の宮良湾、黒島のリーフ沖などでは、海底から磯に運ばれた大岩群が海に点在している情景に遭遇できる。八重山諸島で竹富島と与那国島

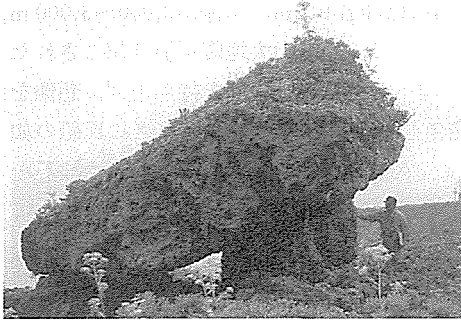


写真21-6 沖縄本島最南端荒崎海岸の崖面に点在する「笠かんじゃー岩」と称される怪岩。津波打ち上げ説の他に、台風暴浪打ち上げ説や古代人築造説など語り継がれている（2003.10.1撮影）

は、犠牲者が出るほどの津波被害には至らなかったとされている。竹富島は八重山諸島の中心に位置し他の島々に囲まれているため津波が弱められたといわれているが、やはり陸地に岩が打ち上げられたとされている。与那国島も八重山の島々を盾にするように奥側に位置しており、断崖に囲まれしかも震源地から最も遠く離れていたためと思われるが、それでも放牧場となっている島東端の東崎^{あがりぎさ}一带には、津波石を連想させる角張りの削れた丸形の砂岩の大岩が数多く点在している。

太平洋と東シナ海が一望できる沖縄本島最南端の糸満市荒崎海岸の断崖では、奇妙な形で2～3個の大岩と小岩が重なり合って点在している(写真21-6)。地元の人達は、「クバがさ」の形に見えることから、通称「かすかんじゃー(笠を意味する)岩」あるいは「笠かんじゃー岩」と呼んでいる。海洋と接する崖先端まで70～80mの距離に位置し、荒天候時には高さ5～10mに潮を噴き上げる琉球石灰岩の岩原に、最長径1.5～2mの小岩の上に地平面と約30度の傾斜角度で長さ8～9m、横幅3～5m、厚さ1～2mの大岩が乗り掛かった不思議な格好の珍岩である。明和大津波で打ち上げられたのかは定かではないようだが、海岸域の状況から推察すると津波石と思われる。しかしこの珍岩には昔の人が人工的に積み上げた怪岩とする説もあり、その存在起源については明白ではないようであるが、見詰めていると、逆に人工説だとすれば、往時、何のために、どのような方法で運搬・積み上げがなされたのか、かえって疑問が深まる。しかし津波打ち上げ説の他に、拝所・支石墓などの人工説や歴史的な巨大台風襲来による打ち上げ説も根強く、古代人への浪漫や自然の破壊的エネルギーへの驚異などが語り継がれている。

琉球列島近海の下海底では、常にユーラシアプレートとフィリピン海プレート

がせめぎ合っている。1771年、石垣島白保沖合40 km、水深が2,000~3,000 mの深海底で発生した巨大な断層運動によって、八重山大地震が引き起こされたと解析されている。海底地形の上下方向への変動が海水面を持ち上げ、想像を絶する巨大津波、「明和大津波」が発生したといわれている。まさに風船の如く大岩を天空に舞わせた明和大津波は、八重山・宮古諸島に今も残る津波石を通して、津波地震の空前絶後の威力と脅威を現代の我々に知らしめている。

4. 教訓に学び噛み締める

今から230年余前に八重山・宮古諸島の島々を呑み込んだ波高80 mを超える世界最大の想像を絶する巨大津波「明和大津波」は、11,000人以上の尊い生命を奪い、多くの島々に壊滅的な打撃を与えた。石垣島や宮古島では、村集落が完全に殲滅し、近隣の島から島民を移住させて再興を図った村集落も多い。しかし230年余の時を経た今、大津波の筆舌し難い悲惨な災害の「生き証人」として残る「津波石」の海岸は景勝・名勝地に生まれ変わり、島を代表する人気のビューポイントや観光スポットとなっている。今は、津波石は前世代人が払った甚大な犠牲と引きかえに伝え贈った現世代人への贈り物「遺産」のようにも思える。

明和大津波の空前絶後の被害に対する世間の記憶は風化しがちであるが、100年、200年オーダーの歳月は、大津波地震の発生頻度では、災害・防災学的には十分に考慮対象の範疇にある。波高10 mの津波が秋田県沿岸に押し寄せた日本海中部地震（1983年5月）では、陸側奥へ数百 mにわたって海拔約11 mの砂丘に、海から大量の消波工ブロックが打ち上げられた（写真21-7）。200年以上も前に八重山諸島の島々に打ち上げられた津波石は、この教訓をすでに我々に語っていたように思う。約35,000 kmの海岸線を有する島国日本の沿岸域には、列島を取り囲むように離岸堤、防波堤、防潮堤などとして消波工ブロックの山が延々と設置されている。埋め立てによる土地造成やウォーターフロント開発などで、構造物や住宅などが海際に迫る海岸域が多い。遠くない将来、東海地震や東南海・南海地震などの巨大地震発生も懸念されている。天空を舞った大岩「津波石」と重ね合わせると、消波工ブロックが雨のように降り注ぐ光景が想像される。島国日本、地震国日本において、「津波石」の教訓は、一瞬、とてつもない凶器と化す消波工ブロックの設置や海岸構造物のあり方に一石を投じているように思う。



写真21-7 日本海中部地震の津波で秋田県峰浜村の海岸域に打ち上げられた消波工ブロック群（文献7より転載）

<フィールドガイド>

・石垣島大浜の崎原公園の巨大津波石までは、石垣空港からバスターミナル行きのバスに乗りしターミナルで下車約15分、ターミナルから白保行きに乗りし大浜で下車約15分、海側に向かって徒歩約10分。

・下地島西岸の巨大津波石「帯大岩」までは、宮古空港からタクシーに乗りして平良港まで約25分、平良港から高速船に乗り伊良部島佐良浜港まで約15分、港から下地島西岸に向かってタクシーで約20分。途中、伊良部島西岸の佐和田の浜に点在している津波石群に立ち寄ることも可能。伊良部島・下地島には定期バスはない。

・宮古島東平安名崎の津波石群までは、宮古空港からタクシーに乗りして平良市内へ約20分、協栄バスターミナルから城辺線に乗りし終点保良まで約40分、保良から東平安名崎灯台方向へ徒歩約40分。

・波照間島高那崎の津波石群までは、石垣港から波照間島行き的高速船に乗船し約60分、波照間港から島南東端方向へ徒歩で約60分。島には定期バスはない。

・沖繩本島最南端の荒崎海岸の怪岩「かすかんじゃー岩」までは、那覇バスターミナルから琉球バスの糸満線（89番）に乗りし終点糸満バスターミナルへ約50分、糸満バスターミナルから琉球バスの南部循環線（107番）に乗りし終点嘉屋武へ約40分、嘉屋武バス停から嘉屋武岬に立ち寄り荒崎海岸へ徒歩で約40分。

<訪調年月日>

- ①1995.8.4, 1996.8.8, 1998.8.4~9（石垣島大浜の巨大津波石） ②1999.4.5, 1999.8.19（下地島の巨大津波石「帯大岩」、佐和田の浜） ③1999.8.18, 2004.3.30（波照間島高那崎断崖の津波石群） ④2000.3.27, 2004.8.20（宮古島東平安名崎の津波石群） ⑤2000.8.6~7（石垣島宮良タフナー原の明和津波遭難者慰霊之塔、宮良湾の津波石群） ⑥2000.8.9（与那国島東崎の不思議な大岩） ⑦2003.10.1（沖繩本

島最南端荒崎海岸の怪岩「かすかんじゃ岩」)

(2003.11.13草稿・2004.7.10推敲・2006.5.4了)

おわりに

琉球列島に踏み入ったのは、今から10年程前の1995年頃であった。海岸線を埋め尽くす漂着ゴミ汚染、河川・海が真赤に濁る赤土流亡汚染の調査で島々を回っていた。本土の海岸域や山岳域の自然に比して、沖縄の自然は開発・汚染行為に対して免疫力が希薄であることを知り、それらの行為が発生すると、逆に脆く、瞬時に壊滅的な破壊に繋がると考えた。同時に『水のない島の人達の水への思い』に心を掻き立てられた。コバルトブルーの海と真白なサンゴ砂浜に縁取られた水の乏しい島々に先人達は、水を求め水の湧き出すところに住みつき集落を造り、やがて『琉球王国』という一つの国が誕生した。『雅』の世界を連想させる優美な文明・文化を築き上げ、栄華を極めた先人達の足跡を辿ると、そこにはいつも、『生命の水』という『生命の根源』が崇め奉られていた。『水』を『水神』として神々の中の最高神に祀り上げ、『自然に神が宿る』という古琉球から何百年も継承されてきた土着信仰の象徴である『水』は、永久に『神』として在り続けて欲しいと願わずにはいられない思いに、駆り立てられた旅の終焉であった。琉球王国の礎を築いた古水に映える先人達のまなざしに触れ、今更わかりきったことだと言うであろうが、『水の尊さ・大切さ』の発する深奥さを感じ取って頂ければ嬉しく思う。

最後に、原稿作成に際して、パソコン上に散在した草稿を数年に亘って推敲し、有益な注意・指摘、写真画像の取り込みなど、まともなストーリーになるように校正してくれた妻の骨折りに対して、誌面を拝借し、記して謝意を表すことをお許し願いたい。

<参考文献>

1章に関して

- 1) 柳田國男 (1978.10) : 海上の道, 第1刷発行, 岩波文庫
- 2) 山口晴幸 (1997.8) : 巨樹に聴く水環境, 第5回水資源に関するシンポジウム論文集, 水資源シンポジウム委員会
- 3) 山口晴幸 (1999.4) : 世界自然遺産「屋久島」(I) —巨樹林を育む水環境—,

- 水利科学, 第43巻第1号, (財) 水利科学研究所
- 4) 山口晴幸 (1999. 6) : 世界自然遺産「屋久島」(Ⅱ) —巨樹林を育む水環境—, 水利科学, 第43巻第2号, (財) 水利科学研究所
- 2章に関して
- 5) 長田昌明 (2002.12) : おきなわ神々の伝説, わらべ書房
- 6) 沖縄県玉城村役場 (経済課)・知念村役場 (企画財政課)・佐敷町役場 (企画財政課) (1997. 3) : 東御廻い 神々と琉球王朝のロマンを訪ねて, 琉球出版社
- 7) 沖縄文化社篇 (1998.10) : 沖縄の文化財, 沖縄文化社
- 8) 高橋恭一 (1968. 8) : 横須賀雑考, 横須賀文化協会
- 3章に関して
- 9) 安座真港切符売り場発行パンフレット (2003.12. 5 入手)
- 10) 知念村役場産業課編 : ちねんガイドマップ
- 4章に関して
- 11) 今帰仁村教育委員会社会教育課文化財係編集 : 「今帰仁城跡」今帰仁村文化財ガイドブック vol. 1, 今帰仁村教育委員会
- 12) 人文社観光と旅編集部 (1973. 3) : 沖縄県・観光と旅「郷土資料事典」, 人文社
- 13) 名嘉正八郎 (2002. 5) : グスク探訪ガイド, ボーダーインク
- 5章に関して
- 14) 文化出版局編集部 (1979. 9) : 季刊「銀花」1979第39号秋, 文化出版局
- 6章に関して
- 15) 宜野湾市教育委員会・文化課 (1995. 1) : 宜野湾市文化財保護資料 第41集, ぎのわんの文化財 [第三版]
- 7章に関して
- 16) 山口晴幸・ウィトツジラワッタナパン・斎藤和伸 (2002. 8) : 亜熱帯南西諸島の水環境, 第6回水資源に関するシンポジウム論文集, 水資源シンポジウム委員会
- 17) 山口晴幸・斎藤和伸・ウィトツジラワッタナパン (2002. 8) : 沖縄県西表島の水環境, 第6回水資源に関するシンポジウム論文集, 水資源シンポジウム委員会
- 8章に関して
- 18) 沖縄地質学会篇 (1982. 3) : 沖縄の島じまをめぐる, 築地書館
- 19) 伊江村役場ホームページ
- 20) 伊江村役場 (1995) : '95年度伊江村概要
- 10章に関して
- 21) 沖縄地質学会篇 (1982. 3) : 沖縄の島じまをめぐる, 築地書館
- 22) 沖縄文化社篇 (1998.10) : 沖縄の文化財, 沖縄文化社
- 23) 山口晴幸 (1997. 8) : 巨樹に聴く水環境, 第5回水資源に関するシンポジウム論文集, 水資源シンポジウム委員会

- 24) 山口晴幸 (1999. 4) : 世界自然遺産「屋久島」(Ⅰ) —巨樹林を育む水環境—, 水利科学, 第43巻1号, (財) 水利科学研究所
- 25) 山口晴幸 (1999. 6) : 世界自然遺産「屋久島」(Ⅱ) —巨樹林を育む水環境—, 水利科学, 第43巻2号, (財) 水利科学研究所

11章に関して

- 26) 河名俊男 (1988. 1) : 琉球列島の地形, 新星図書出版
- 27) 大沢夕志・大沢啓子 (1997. 7) : 南大東島自然ガイドブック, ボーダーインク
- 28) 南大東村役場 (1994. 1) : 村勢要覧, 南大東村役場
- 29) 山口晴幸・ウィットゥン ジラワッタナバン・斎藤和伸 (2002. 8) : 亜熱帯南西諸島の水環境, 第6回水資源に関するシンポジウム論文集, pp.421-426, 水資源シンポジウム委員会

12章に関して

- 30) 仲宗根将二 (1997.10) : 宮古風土記<上巻>, ひるぎ社
- 31) 仲宗根将二 (1997.10) : 宮古風土記<下巻>, ひるぎ社
- 32) 沖縄文化社篇 (1998.10) : 沖縄の文化財, 沖縄文化社
- 33) 大木隆志 (2002. 6) : 海と島の景観散歩, ボーダーインク
- 34) 沖縄地学会篇 (1982. 3) : 沖縄の島々をめぐる, 築地書館
- 35) 真栄城守定 (1982.11) : 宮古・地域開発胎動, ひるぎ社
- 36) 山口晴幸・ウィットゥン ジラワッタナバン・斎藤和伸 (2002. 8) : 亜熱帯南西諸島の水環境, 第6回水資源に関するシンポジウム論文集, 水資源シンポジウム委員会

16章に関して

- 37) 沖縄文化社篇 (1998.10) : 沖縄の文化財, 沖縄文化社

18と19章に関して

- 38) 宮良保全 (2000. 3) : 与那国島の民俗と暮らし (第一分冊), 与那国町教育委員会発行
- 39) 池間栄三 (2003. 8) : 与那国の歴史 (第八版発行), 池間苗発行

20章に関して

- 40) 池間栄三 (2003. 8) : 与那国の歴史 (第八版発行), 池間苗発行
- 41) 高良倉吉 (1997. 7) : おきなわ歴史物語, ひるぎ社
- 42) 真栄城守定 (1982.11) : 宮古・地域開発の胎動, ひるぎ社

21章に関して

- 43) 平良市編 : 平良市史第一巻通史編Ⅰ (先史～近代), 平良市発行
- 44) 河名俊男 (1988. 1) : 琉球列島の地形, 新星図書出版
- 45) 中山盛茂 (1969) : 琉球史辞典, 琉球文教図書
- 46) 池間栄三 (1959.11) : 与那国の歴史, 池間苗発行

- 47) 力武常次・竹田厚監修（1998. 4）：日本の自然災害，国会資料編纂会
- 48) 山口晴幸（2001. 6）：ジオアート・津波石―天空を舞った巨大岩，「海岸」，Vol. 41，No. 1，（社）全国海岸協会
- 49) 東海大学篇（1984. 3）：昭和58年日本海中部地震写真報告集，東海大学海洋学部海洋土木工学科

（防衛大学校教授・工学博士）